
フェトレアス物語～第二次スピルナ動乱～

稲本 楓希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェトレアス物語〜第二次スピルナ動乱〜

【Nコード】

N8001Q

【作者名】

稲本 楓希

【あらすじ】

ユースナ暦1337年、スピルナ公国は、十年の間続いた第一次スピルナ動乱を終結し、ひと時の安らぎを得ていた。しかし、そんな今、スピルナ公国では早くも新たな影が動き始めていた。

序章

世界の中心に位置する最も大きな大陸であるゼンロ大陸。

その中央から、やや西に行った所にあるスピルナ公国。

そこから今回の物語は始まる。

まず、スピルナ公国の基礎知識から説明しておこう。

この地に住む国民は、そのほとんどが大昔に別の地から移り住んだ移民である。そのためスピルナはその中で幾つもの部族に分かれていて、考え方も風習も無数にある。

スピルナ公国は、その部族の内、非実力行使に重きを置く通称トランプと、その反対派であるアルカナと呼ばれる二つの勢力と、両者の意見をもとに最終決定をして政治を行う最高権力である、アルデバラン・アルト公によって成り立っている。

このシステムはスピルナ動乱と呼ばれる大規模な動乱の後にその再発を防ぐために発案された物である。

トランプとアルカナは国民より選抜された五人の代表者からなり、彼らは有事の際にはスピルナ守護のために奔走する精鋭部隊でもある。

―スピルナ公国首都アルス・フェルメ・エトワル城―

コン、コン、

城の中でも一際大きい部屋にノックの音が響く。

部屋には少女が一人だけいた。

「何か用？」少女はノックの主に答えた。その声は、華奢な見た目とは裏腹に威厳に満ちていた。

「隊長、隊員の準備が整いました。隊長も取り急ぎご準備を。」
ドア越しに聞こえる声も、まだ十七歳の青年とはとても思えない、乱れのない律義な言葉だった。

「アトルか。」少女は短く答えた。喋り方から、少女の方が明ら

かに目上であることが分かる。「その堅苦しい話し方はやめると、いつも言っているだろう。」少女は続けて言った。

「今は仕事中ですから。」アトルと呼ばれた少年はあくまで節度を崩さない。

「ハア・・・」少女はアトルのあまりの律義さに呆れてため息をついた。「アトル、お前はトランプでの地位以前にアルデバラン公の息子であろう。それが私ごときに遜っていてどうする。」

「でも、仕事は仕事ですから。それに、人は生まれや才能では左右されないと言うのが父上のお考えです。」アトルの答えはまるで用意してあったかのように完璧だった。

こういうやりとりは日常茶飯事なので、或いは本当に用意していたのかもしれない。

「ハア・・・」少女は再びため息をついた。

「お前は本当に相変わらずだな。」

「それよりも早く出立のご用意を、隊長。」

「隊長などと呼ぶな。呼ぶなら・・・」この瞬間、少女の中で抑えていた物が弾け飛んだ。

「カーラと呼んで！」それまでとは打って変わった甘えた声で。

今度はアトルがため息する番だった。この少女・カーラは十四歳でトランプの隊長に抜擢される程の秀才であるが、その幼さ故にまだ精神的に未熟で、幼なじみであるアトルと二人きりになると普段トランプの隊長としての威厳を保つために人前では抑えている人並みの感情がまとめて表に出て来てしまふ、いわゆる二重人格なのである。

「隊長、今はそんなことよりも・・・」

「嫌！カーラって呼んでくれないとだめ！！」カーラはより一層騒ぎ立てた。このままではきりが無い。

そこで、アトルは仕方なく最後の手段に出ることにした。

「隊長、早く準備しないと置いて行きますからね！」そう言っつつかつかと去って行く。

「・・・つてちよつと！？アトル！？待ってよー！」こうしてカ
ーラはやつと準備を始めた。

―フェルメ・エトワル城中庭―

「あ、隊長、やつと来ましたね。」中庭にはアトルと副隊長であ
るゼツタ。そして今ついたばかりのカーラ。

「急いでくださいよ。隊長のおかげで30分も遅れてるんですか
ら。」アトルは続けて言った。

「人間の一生に比べれば30分など取るにたらんよ、アトル。」
爽やかに返す隊長モードのカーラ。

「すいません、隊長、意味解らないです。というか、早くいきま
すよ。」と軽いなすアトル。

「さて、」ここで初めてゼツタが口を開いた。「それでは、今回
の我々の任務を確認する。

我々は、テルフ同盟加盟国であるエンリアルルの要求およびデルナ、
ドルーゴ両国の賛同、それに対するスピルナ公の承認に基づき、こ
れより東の大地・エンリアルへと赴く。その目的は、エンリアルに
潜伏しているという賊の捕縛もしくは撃退である。なお、今回の任
務に着任するのはカーラ・ゴート、ゼツタ・ベルク、アトル・アル
トの三名である。

よろしいか？」その確認の言葉に他の二人は頷いた。

「では、これより任務を開始する。」この号令はリーダーの役目
である。

こうして、彼らは知らずの内に、これから始まる壮絶な戦いへと
歩を進めるのだった。

第一章 「宣戦布告」

ゼンロ大陸の中心から東南にあるゾド山脈。

幾つもの巨大な山が連なっているが、その山中に植物は全く生えていない。

それは、度重なる火山活動と、そこに住む竜の吐く炎が、地面を焼いたことを意味している。

山脈の中央には一際大きな山、ヤハラ山があるが、ここは竜族の長達が集う場所で、竜族以外の者が立ち入ることを許されたためには無い。

ゾド山脈に住まう竜族には独特の掟や決まりごとがあり、それを破る者は許さないため、ゾド山脈に来た時は下手な行動は控えるべきだろう。

―ゾド山脈・地竜の谷―

「それにしても、今回の任務って、なんだか変じゃないですか？」
アトルは険しい岩壁に挟まれた道を歩きつつ、前に行くゼツタに聞いた。竜族の住家であるこの山脈は、近くで見ると龍の爪跡と思われる巨大な傷が所々にあるのを見ることができる。また、時折遠くから龍の遠吠えらしき音も聞こえる。

「何故だ？」ゼツタは短く聞き返した。

「だって、トランプつてもともとスピルナを護るために造られたんでしょう？ テルフ同盟はなんでそのトランプにエンリアルルの救援を要求したんでしょうか。」アトルは自分の考えを明かした。

「お前は自分の父親を信用していないのか？」ゼツタは痛い所を突いてきた。

「いえ、そういう訳では・・・」むろん、そう言われては信用していないなど到底言えない。アトルの父親は一国の公なのだから。

「ならば、気にすることなどなかるう。」ゼツタはアトルの話な

ど聞く気もないようだ。

「ですが・・・」アトルは言葉に詰まる。

「スピルナ公国はまだテルフ同盟に入って日が浅い。スピルナ公は同盟の信頼を得るために我々を同盟国で働かせようというのだろう。その何がおかしいのだ？」そこでゼツタはこんな話はこれで終わりと言う様に手を振り、前の方に歩いて行った。

「それはそうですが・・・」それでもアトルは、心の片隅に抱く嫌な予感を拭い去ることができなかった。彼は気付くと無意識の内に左手を自分の剣の柄に置いていた。

ふと、アトルは何かの気配を感じ取った。何か危険な物が近付いているような感覚だ。反射的に臨戦態勢を整える。他の二人もその気配に気付いたらしく、すでに迫り来る何かに備えている。

果たして、それは来た。

地面に幾つもの小さな黒い点ができたと思うと、それは見る間に大きくなっていった。それが上から落ちて来る巨大な物体の影であることに気付き、三人は後ろに退いてその影の外側へと避難した。

次の瞬間、その影の主が落下・着地し、砂埃を立たせた。着地の瞬間、アトルは暴風を食らって、吹き飛ばされないように歯を食いしばって耐えた。

落ちてきたのは三頭の竜だった。どれも体長三メートルを超える巨体で、いかにも怒った様に吠えている。

「隊長、これは！」アトルは今にも襲い掛かって来そうな竜に細心の注意を払いつつカーラの方を見た。

「これは・・・竜だな。」とカーラ。こんな時でも冷静なのが凄い。

「・・・って、それは見れば分かりますよ！」アトルがつつこんだ。

「しかしおかしい。竜族には以前会ったことがあるが、これほど獰猛ではなかったはず。まるで・・・」しかしカーラのその言葉は

竜の一端がもどかしげに尻尾で地面を叩く音のせいで掻き消された。どうやらあつちは早く戦いたくて仕方がないらしい。

「二人とも、気を抜いていると殺されるぞ！」ゼツタが叫んで注意を促す。

「とにかく、今は戦うしか無いようだな。いくぞ！」カーラが言い、三人は戦闘を開始した。

まず、黄色い鱗を光らせた一頭の竜が唸り声を上げてゼツタに躍り掛かってきた。それに対しゼツタは眉一つ動かさず得物である二つの短刀の内の一つを抜き、姿勢を低くして素早い動きで竜の懷に潜り込んだ。次の瞬間、黄色の竜は大きな悲鳴を上げた。ゼツタの短刀が鱗のない腹にえぐりこんだのだ。ゼツタはすぐに短刀を引き抜き、バックステップでその竜と距離をとった。相手が巨大なため、短刀では痛みこそ与えられるが、決定打にするのは難しいのだ。

一方その頃アトルも別の赤色の竜と戦っていた。アトルは腰の細身の剣を抜き応戦している。アトルの剣は青白い光を放っているが、これはアルト一族に伝わる特殊な能力で、己の体力をバチと呼ばれるエネルギーに変換させる戦闘法であり、それを自分の体や武器に纏わせる事で戦闘力を上げることができる。それによって素早さに長け強度に欠ける細身剣の弱点を補うのがアトルの戦法である。しかし、バチはその分体力を消費するので、実際には気易く使える技ではない。アトルはバチの力を得て切れ味と強度が上がった剣を巧みに操り赤竜の猛攻をいなしている。

また、茶色の竜と戦っているカーラの武器は持ち主の大きさに見合わない大剣である。しかし当人はまるでそれが軽い棒であるかのように片手で操っている。棒術の技術を応用した回転の力を利用する舞にも似た剣術はカーラが自分で創り上げた物だ。遠心力と剣の重さを組み合わせて繰り出される剣撃は、鋼を超える堅さを誇ると言われる竜の鱗さえものともしない威力であった。

状況はトランプ側の圧倒的有利だった。しかし、あと少しで竜族の敗北かと言う時、突然崖の上から声がした。

「まったく、だから俺はボスに言ったんだ！こんな子竜ごときじゃトランプは倒せねえって。」見ると崖の上には一人の男が立っていた。見た目は普通の人間だが、実際には内に秘める非人間的な野性を隠し切れないという風な男だった。

「貴様はっ！？」ゼツタが叫んだ。他の二人もその男を見上げる。彼らの傍には、既に瀕死の竜が三頭伸びていた。

「よお、トランプの諸君。」その男は声高に言った。「尤も二人ほど足んねえみてえだが。まあそんなことはどうでもいい。」そう言って男は何メートルもある崖の上から跳び出した。

そんなに高い所から飛び降りたら危ない？そんな心配はご無用。彼にとつてこの程度の崖など公園の遊具程度でしかない。すたっ、という軽い音を立てて男は着地した。

「お前は確か！」その姿を見てカーラは言った。そして続けて言う。「スピルナ公国精鋭部隊アルカナ戦闘員・ヴァイス。フルネームはヴァイスル・ベトラ・ハルライガ。出身地はスピルナ公国レグラ地方ハルクム村の農家。生年月日はユースナ暦千三百十五年七月四日。二十歳で才能を認められアルカナに入隊し……」

「って、どれだけ覚えてるんですか！」何もこんな時までと思いつつアトルがつっこむが、カーラは止まらない。そして、

「……現在二十二歳・独身。ちなみに好きな異性は……」

「そ・れ・言・う・な・っ！！！」と敵であるはずのヴァイスまで巻き込む始末。

「まったく、いつつもてめえらには調子狂わされるぜ。」カーラの暴走が収まった所で仕切なおし。

「らって言っても隊長だけですけど……。」と一応訂正しておくアトル。

「それで、アルカナの戦闘員がこんな所で我々に何の用だ？」ゼツタが話を元に戻した。そこでカーラとアトルも表情を引き締める。「そんな怖えー顔すんなよ。べつに喧嘩しに来た訳じゃねえよ。」大げさに恐がってみせるヴァイス。わかりやすい演技である。

「ほう、そうか。」カーラもそれに対し爽やかに返す。「それならば、この子竜達はどういう事かな？」そう言ってカーラは倒れている三頭の竜を指差す。

「やはり、これも彼の仕業なんですか？」アトルがカーラに聞いた。

「ああ、先程のこの竜達は明らかに様子がおかしかった。そもそも竜と言うのは頭のいいやつらで、やつらにとってたいした食糧にもならない人間を、しかもわざわざ真つ正面から襲うことなど有り得ない。私はランプとアルカナの全ての人員のプロフィールを暗記しているが、お前の能力は確か獣の本能に働きかけ、獣を操るという技だと書いてあった。この竜を我々にけしかけたのはお前だろう？それに、何よりさっきのお前の言葉は自白に等しいしな。」カーラが説明した。

「さすがランプの隊長。探偵ごっこもおてのものってわけだ。」ヴァイスはわざとらしく拍手して見せた。「ま、こっちももともとバレル前提で来てっけどな。」

「では、どういう事が説明してもらおうか。」ヴァイスの言葉に確信を得たゼツタが問い詰める。

「だからあ、そんな怖い顔すんなつて。喧嘩しに来た訳じゃないつつつてんだろ。」そう言い終わった次の瞬間、ヴァイスを包む霧困気が豹変した。外側に被っていた人間らしさを脱ぎ捨てて、敵を威嚇する猛獣そのものになったというような感じた。そしてついに本題に入る。「こいつは宣戦布告だ。俺達アルカナはある計画の遂行のために、エンリアルにいる。もしこの計画が成功すれば、スピルナはアルカナの物になるだろう。もしこの計画を止めたければ、エンリアルに来い。そこでめえらを叩き潰してやる。」

その言葉が終わった時、ヴァイスは既にそこにはいなかった。何らかの方法でワープしたか、或いは元から幻影だったのかもしれない。少し経って、ゼッタが口を開いた。

「どうやら、お前の予感当たっていた様だな、アトル。」しかしその時、アトルは別の事を考えていた。

（そうだった、副隊長は知らないんだ。スピルナに反逆しようとしているアルカナを、トランプが止める。これは、そんな簡単な事じゃない。アルカナと戦うということは隊長にとっては・・・。）アトルは気遣わしげにカーラを見やった。黙って何かを考えこんでいる彼女の姿は、何も知らない人間にはいつも道理に見えるだろうが、アトルにはその水面下に渦巻く心の闇が確かに見えた。

その後、無事ゾド山脈を抜けた一行は、その先にあるキズナの森も通過し、大陸の東端から、エンリアルへの道の間にある島国、ザドウィル王国に移動するために同盟が手配した船に乗ることとなった。

「へえ〜。これが海ってやつですか。」アトルは海辺から見える海の超自然的な芸術に感嘆の声を上げた。

「お前、海ははじめてか。」ゼッタもアトルの横で目の前に広がる海を眺めている。

「はい！副隊長は以前に来たことがあるんですか？」アトルは彼にしてはめずらしく眼を輝かせている。

「まあ、何度かな。」普段は見れないアトルの子供らしい表情に、ゼッタは苦笑する。

「じゃあ、隊長は？隊長も海は見たことがあるんですか？」そう言っただけでカーラの方を振り返る。しかし、少し離れた所にいるカーラはじつと海を見ていて、その質問には答えなかった。アトルは想定していた事だが、あの宣戦布告の後から、カーラは少し様子がおかしかった。事情を知らないゼッタでさえ何かを察したらしく、二人

に早く船に乗るように勧めた。

・・・その後。

船が出航したその瞬間、アトルは敢なく戦闘不能となった。

「ま・・・まさか、船酔いというものが、これほどの破壊力を持つているとは知りませんでした・・・」アトルは船室のベッドに倒れ込み、虫の息で言った。

「まったく、さっきまでのしやぎ様はどこえやら、だな。」ゼツタは船室の椅子に座り、半ば呆れ、半ばおもしろそうに言った。ちなみに、ゼツタとカーラはノーダメージである。「まあ、初めて船に乗ったのだから、それくらいしょうがないがな。」

「・・・すいません、この重要な時に・・・」アトルは心底すまなさそうに言った。

「そう悲観するな。エンリアルに着くまでにはまだ時間がある。船酔いなど、その間に馴れてしまえばどうということはない。」とゼツタは励ました。実際、エンリアルに着くまではあと数日かかる。

「でも、もし今アルカナに襲われたら・・・」

「恐らくそれはない。あんな大胆な宣戦布告をしてくるくらいだ。理由までは分かんが、本当にエンリアルで決着をつけるつもりなのだろう。もし我々を倒したいだけなら、あの時に戦えばよかったはずだ。」ゼツタの言うことは確かに筋が通っていた。それでアトルも少し安心する。

「それもそうですね・・・そういえば、隊長は？」アトルはふと気になって尋ねた。カーラはさっきから姿が見えない。

「さあ、さっきまで甲板に居たんだが・・・。自分の船室あたりにいるんじゃないのか？」アトルの言葉に、ゼツタも少し不安を感じはじめた。「捜して来た方がいいか？」

「いえ、たぶん大丈夫だと思うんですが・・・」アトルは言葉ではそう言ったものの、本気でそう思っている訳ではなかった。

ゼツタはどうやらそのことを見抜いたらしく、カーラを捜すため

に船室を出ていった。

「さてと、副隊長もいなくなった事ですし、そろそろ出てきたらどうです？」ゼツタが去った後、アトルは何気ない口調で近くにある酒樽に向かって言った。

「・・・ばれてた？」悪びれもせずそう言っただけで酒樽からひよっこり顔を出すカーラ。

「バレバレですよ。十年も一緒にいるんだから、隊長が隠れそうな場所くらい解りますよ。でも、いつの間に入ってたんですか？」カーラはそういう所だけはいつでもちゃっかりしている。

「だから、名前で呼んでって、いつも言ってるじゃない。」カーラは頬を膨らませて言った。アトルが察するに、今の状態は隊長モードと本音モードの中間やや本音側のようだ。完全に本音モードになると、こんな物では済まない。そしてカーラが続けて言う。「それで、今日は何して遊ぶ？」

「・・・今日は勘弁してくださいよ。ただでさえ死にそうなのに。」カーラの言う「遊び」を、船酔い状態で無理にすれば、ホントに死にかなない。

「アトルのいじわる。」しかし本音カーラは勿論そんなこと知ったこっちゃない。「昔はよく遊んでくれたのに。」

「だから、そう言う問題じゃないって言ってるじゃないですか。」カーラはそんなことは全く気にしないと云う事は分かっている、ありのままを言うしか今のアトルには手はなかった。

「でも、お兄ちゃんは病気の時だって遊んでくれたもん。」カーラの頬はどんどん膨らんでいく。

「まったく、いつの話してんですか。あなたの兄さんは・・・」しかしアトルはその先は言えなかった。カーラの言葉に、思い出しちゃったからだ。暗い暗雲立ち込める中、別れ行く二人の兄妹の姿・・・忘れたくても忘れられないあの時のことを・・・。しかしカーラはそんなアトルの心境などまるで気付かない。

「遊んでくれないと、遊んでくれないと・・・」そして、アトルはカーラの堪忍袋がメリメリいう音を聞いて、限界がきたことを悟る。

そして次の瞬間、暴走し始めかけたカーラを、アトルは船酔いした、ふらふらする体で止めなければならなかった。あるいは、そこまでして止めなくてもいいだろうと言う人もいるだろう。だが、アトルがことごとくカーラの暴走を止めようとしているのには、ちゃんと理由があった。それは、カーラ自身のためである。カーラは普段、自分の意思で全ての感情を抑え込んでいる。それは、十六歳の彼女にしてみれば、並大抵のことではない。そのため、アトルの前で本音が出てしまうのはしょうがないことだというのは、アトル自身理解している。

しかし、それほどに自分自身を抑えてまでしてやっとな彼女はトラップの隊長になれたのだ。もしこの「本音」のことが周りに知れて、カーラがトラップから外されてしまうようなことになれば、カーラがそれまで努力してきた物が全て無駄になってしまうのだ。自分のせいでカーラの努力を水の泡にするくらいなら、心を鬼にして、彼女を抑えるべきだ。

それが、アトルの考えである。もつとも、それはあくまでゼツタや他の人間が近くにいて、そのことがばれる可能性がある時にだけだが。

「ふう・・・。」無事カーラを外に追い出した後（カーラの本音モードは、アトルと二人きりの時しか出てこない）、他の人間がいるところに連れていけば出て来なくなる）、アトルはため息をついた。実は、こうしてカーラを突き放すのは、根が優しいアトルにとってはかなり苦勞なのだ。今は船酔いの影響もあるのでなおさらだ。

それでも、アトルは、カーラのためならなんでもすると誓ったあの日を忘れてはいなかった。

二章に続く

第二章 「動き出す者達」

ゼンロ大陸の東にある島国、エンリアル王国。

現在解っている限り最も長い歴史を持つ国で、数千年前のある時代（この時代は、現在では“黄金時代”と呼ばれている）、全世界統一を実現したといわれる伝説の古代文明、エリユアルス王のイクイア王国の謎に包まれた技術の断片を引き継ぐ唯一の国でもある。それゆえに、国民皆が高い誇りと、高潔な精神を持っていると言うことで有名である。

また、エンリアル王家には、代々受け継がれるイクイアゆかりの秘宝があるといわれているが、その存在もまた謎に包まれている。現在は、四十九代目の国王であるアエトレス・リオ・レアロス王、その王子のエータ・レアロス、そしてその許婚である王女デュオ・ファストレスによって治められている王国である。

―エンリアル王国・オロ・レクエルド城―

「全く、たかが四人の賊ごときを殲滅するのに、何を手間取っている！」その日もまた、アエトレス王の激昂した叱責が城全体に響いた。部屋の前にいた衛兵はその声のあまりの大きさに首を竦める。「はっ、申し訳ありません、国王陛下。」国王の怒りを鎮めようと床に頭をこすりつけて平伏する大臣。七日前、初めて例の賊による被害の報が入ってから、ずっとこんな調子である。

例の賊とは、ここ一週間エンリアルを騒がせている謎の集団のことで、彼らは、王国内の幾つもの村を無差別に荒らしておきながら、駐留軍の追跡からことごとく逃げているというのである。荒らされた村は基本的に全滅しているため情報が少ないが、目撃者の証言から察するに、たった四人の集団だと思われる。

ここは国王が直接関与するような重要かつ内密な会議の際に使われる会議場である。最も、これほど大声をあげていては内密も何も

あつたものではないが。

円形の会議場は白を主体とした美しい彫刻や装飾が幾つもあり、その間を金の細いラインが通り幾何学模様を成している。

その中に国王の座る豪華に飾られた玉座と、その両脇に王子エータと王女デュオが座る、玉座に次ぐ豪華さを持つ椅子がある。

大臣が居るのは、その三つの座席に囲まれた、会議場の中心にあたる場所である。そんな圧迫感の中で国王の説教を聞かなければならない大臣は、不憫としかいいようがない。

ちなみに、玉座向かって右側に座っているエータは、国王が怒鳴っている間、ずっと両手で耳を押さえていた。大臣よりも近くで国王の怒鳴り声を聞かなければならないので、ある意味とばかりだが、それにしても王子にあるまじき行為である。

「しかしながら陛下、あと数日すればスピルナから精鋭部隊が救援に到着致します。そうなれば彼らと共に賊共を殲滅できます故、もう少しお時間を・・・。」しかし、大臣が国王の機嫌取りのつもりで口にしたこの言葉さえも、国王の怒りという名の火に油を注ぐのみの結果となった。

「それがいけないというのだ！ 永い歴史をもつこの王国が、自力で四人の賊すら倒せず、他国の助けを借りなければならぬとは、嘆かわしい！」これでは、何を言っても無駄である。

「恐れながら、お父様。」タイミングを見計らって、デュオが仲裁に入る。このままでは国王は勢い余ってこの有能な大臣を死刑にしていまいかねない。

「このまま大臣を尋問し続けても、なんの得がありませんか。今はそれよりも、例の賊に対する策を練る方が先決かと。」

大臣は、デュオのその言葉に国王の怒りから逃がれる光明を見出した。国王はいつも王女の言葉にだけは弱いのだ。大臣は思わず安堵の表情を浮かべたが、まだ平伏した状態なので、それは誰にも見られずにすんだ。もし今安堵したことがばれれば、またそれを理由に怒られることになっただろう。

国王は、少しの逡巡の後、こう言った。

「よからう、大臣。あと一度だけ機会をやるう。もし次やつらが現れた時に対処できなければ、その時は、相応の処置がとられることになるであらう。」国王は、あえて“相応の処置”について詳しく言わなかった。むろん、わざわざ言葉にしなくても分かる訳だ。

「はっ、ありがたき幸せにございます。このレハベアム、勇猛なる英雄レドノスの御霊に誓って、次こそ、例の賊を仕留めてご覧にいれましょう。」何か大きな誓いを立てる時に、英雄の名を使うのが、エンリアル流である。あえて分類するなら、先祖崇拜の類だ。こうして、今回の会議も（ギリギリで）無事に終了した。

「まいどまいど親父の怒鳴り声には参るぜ、まったく。」エータは城の回廊を歩きながら愚痴を言った。その声は大理石でできたただっ広い回廊の壁に跳ね返って反響する。エータは、なぜ王家はここまで城を広くしななければ気が済まないのだろうとも思う。

「だからって、あんなにあからさまに耳を押さえることないじゃない。」横を歩くデュオが窺める。デュオの傍には背丈十五センチほどの妖精、彼女の守護妖精であるヴァルファールとハルバートが付き添っている。

彼らは魔法の力によってデュオの心から創り出されたデュオの一部でもあり、非常時に彼女を護衛するのが一番の指令だが、それ以外のときはデュオの側近のようなものである。

「しょうがねーだろ、うるさかったんだから。というかよく耐えられたな、お前は。」エータが軽く感心した様に言う。

「誰かさんみたいな不様な格好するよりはマシよ。」デュオは軽い皮肉を込めて言った。しかしその時エータは何事か考え込んでいたらしく気にした様子も無かった。

「・・・ところでさ、」しばらくの間のと、エータが言った。
「なあに？」デュオがエータの顔を覗き込むようにして先を促す。

「今回のこと、どう思う？」エータが少し真剣な声で言ったので、デュオはそれが重要なことだと悟った。普段のエータを知っている人間なら、彼の「少し真剣」がどれほど珍しいものかが分かるだろう。

「今回のことって？」デュオは聞き返した。

「だから、例の賊と、スピルナからの救援のことだよ。」エータがこれほど落ち着いて話すのも、普段ではまず見られない。「おかしいと思わないか？エンリアルスの近くにある同盟国なら、ザドウィルとかがあるのに、わざわざ遠いスピルナから、なんて。」

「でも、この決定にはデルナ、ドルーゴ、スピルナの三国が関わってるんでしょ？一国だけで決めてるわけじゃないんだから、悪巧みなんてできないとおもうけど。」言葉ではそう言うものの、デュオも心のどこかで不安を感じはじめたようだ。

「じゃあその三国ともグルってことだ。」エータは大変な事をはつきりと言いのけて見せた。今の台詞が身内以外の誰かに聞かれてもしたら、それだけでもどんな波紋を呼ぶか解ったものではないのに。そして続ける。「いいことにしろ悪いことにしろ、何か企めるのは間違いない。特にスピルナは。」

「スピルナが？どうして？」デュオはエータの考えていることが解らなかった。スピルナはデルナとドルーゴに提案されてトランプを派遣したのだ。むしろその三国の中では一番可能性は低いように思えるが。

「・・・実は、ある信頼できる情報筋によると、今スピルナでは、アルカナが行方不明らしい。」さすがのエータも、こればかりは小さな声で言った。

「アルカナって、スピルナ精鋭部隊で、トランプと対立してる方のこと？でも、そんな話、スピルナからは・・・」困惑するデュオ。

「そう、スピルナはそれを隠してる。だからこそ怪しいんだ。」そして遂に話の核心を話す。「考えてみるよ。アルカナの構成員は五人。そして例の賊の人数は・・・」

「でも、例の賊は四人でしょ？」デュオが口を挟む。

「もし俺が賊の立場だったら、親玉はそう簡単には動かさないな。その上、スピルナからのランプの派遣。これが意味するところは……」エータはあえてその続きは言わなかった。

「それじゃあ、どうするの？」デュオにはすでにエータの答えは解っていたが、一応聞いてみた。

「俺か？俺は、そうだな……」そして言った。「ちょっと散歩に行ってくる。デュオが大臣を庇うのも、そろそろ限界みたいだからな。」エータが気軽な声で言ったそれは、デュオが予想した通りの答えだった。

そう言つて歩み去っていくエータの背中を、デュオはただ見つめる事しかできなかった。止めても無駄だと解つていても、やはり、エータを危険なところに行かせたくはなかった。

エータが自分の部屋に戻ると、そこには先客がいた。

「よう、着いたか。」エータは窓際の机に腰掛けてたそいつに声を掛ける。部屋が暗くてそいつの姿がよく見えないが、それはそいつが窓の明かりを遮っていたからだだった。普通に考えれば、この部屋にあるあの大きな窓から入ってくる太陽光を、人間一人で遮り切れる訳はないのだが。

「ん……おはよう、エータ。」そいつは間延びした声で返す。

「おはようつて、今年後2時だぞ。」エータは軽くつつこむ。この会話は、そいつに会う度に呆れるほどしている。「相変わらず寝ぼけたやろーだな。」

「そんなこといったつて、眠いものは眠いんだから、しょうがないじゃないか。」こいつの間延びした声で言うと、こんな文章でも長く感じられる。

「それと、ついでに言つとくがお前、寝癖ついてるぞ。」これもマンネリ化している会話の一つである。

「そんなのいつものことじゃん。」当たり前のようにそう言つて

まったく気にしないそいつ。

「ホントに相変わらずだな、パルト。」ここで初めてそいつ・パルトの名を口にするエータ。「せめてそのむかつく寝癖くらいは直ってもらいたかったんだがな。」

「でも、ついさつきまで寝てたんだから、どっちにしろ直すヒマなんてなかったじゃん。」当たり前のように凄いことを言っているそいつ。

「やっぱり寝てたのか！」予測していたことでも、驚くものは驚く。「一日にどれだけ寝てんだよ、お前は。」

「んー、大体16時間くらいかな。」欠伸雑じりに言うパルト。

「一日の三分の二じゃねえか！」今度は本気でつつこむエータ。

「どんな体してんだ。オメーは。まあそれはいいとして、」あまり変な方向に行く前に起動修正する。

「本題だ。何か新しい情報は入ったか？」

「うん、あるよ。」真剣に言うエータに対し全く自分のペースを崩さないパルト。「ゾド山脈を通過してたトランプが、三人の子竜に襲われたみたい。」

「竜が？どういうことだ！？詳しく話せ。」エータの驚きはトランプが感じた物よりも大きかった。何より竜の友人を持っていて、竜のことをよく知っている分、竜がそんなことをするのは信じられなかった。

「ぼくの友達が見てたんだ。子竜の方から攻撃をしかけたんだって。それでトランプが反撃して、トランプが勝ったって。でも、なんだか子竜の方は様子がおかしかったみたい。まるで誰かに操られてたみたいに。」パルトの説明が終わった後、エータはしばらく考え込んでいた。そして、数分後、ついに口を開いた。

「その状況から考えると、もし子竜達が操られていたとすれば、操っていたのはアルカナか？だが人間が、子供とはいえ竜を操るだとか？そんなこと出来る訳無い。」カーラは竜に関して『頭のいいやつら』と言っていたが、厳密に言えばそれは間違いと言える。

竜族の知能は、人間のものさしでは計ることなどできない。それほどまで高い知能を備えているのだ。その上魔力に關しても人間の比ではない。子竜といえどそれを操れる人間など、居ていいはずがない。

「やっぱり真相を探るには、自分で調べるのが一番、だな。」エータはそう呟いて、壁に飾られていた独特な形の矛槍、使い慣れた武器“エイレア”を手にとる。

「パルト、準備はできてるか？」そしてパルトに呼び掛ける。

「もちろん、ぼくはいつでも大丈夫だよ。」パルトはそう答え、それまで部屋の窓を遮っていた物・彼自身の背中から生えている竜の翼を軽くはためかせて見せた。「だって、そのためにぼくを呼んだんでしょ？」

「御名答。それじゃ、行くとするか！」

数分後、音も立てずに城から飛び立ったドラゴンの影があつたが、それに気付いたのはたまたま空を見上げていたデュオ一人だけであつた。

三章に続く

第三章 「予言」

ザドウィル王国。それはゼンロ大陸の東に位置する南北二つの島からなる島国で、数十年前建国されたばかりの新しい王国である。それは、現国王の名前が、そのまま国の名前になっていることから察せられる。要するに、今の国王が初代なのである。

南の島は平民の居住区、北の島はまるまる一つが王城という特殊な地形の国である。北の島「レイクエント城」は、世界で最も巨大な城の為、テルフ同盟の会議は基本的にここで行われる。

ちなみに、ゼンロ大陸から見てエンリアル王国はザドウィル王国のさらに東側に位置している。

そのためエンリアルへと向かうトランプ一行は中継地点としてのザドウィル王国に立ち寄る事となった。

―レイクエント城西の港―

「ふう〜。やっとあの恐ろしい船酔いともおさらばですね。ホントに参りましたよ、今回ばかりは。」そう言つて久々の揺れない地面を満喫するアトル。海を振り返ると、船が出る前と同じく青く美しかったが、今のアトルにとっては恐ろしくさえ映った。

「そんなお前に言つて置くが、ゼンロからここまでの距離よりもここからエンリアルへの距離の方が数倍長いぞ。」アトルができるだけ考えない様にしていたことをズバリ指摘するゼツタ。

「・・・今はその事は考えたくないです。」辛そうな声で言うアトル。船酔いから解放されたとは言つてもまだ全快ではない。その証拠に、彼の顔はまだ青ざめている。

「全く、情けないぞアトル。そんなことで来るアルカナとの戦いに勝ち残れるとは思わないことだ。」と厳しい事を言うのはカーラだ。どうやらある程度調子は戻ってきたみたいだ。

「そんなこと言われましても・・・」船酔いは馴れの問題だから、

気力やなんかで何とかなるものではない。もしかしたら、カーラはこの前部屋から追い出したのをまだ根に持っているのかもしれない。「それにしても・・・」ゼツタが海の反対側を振り返って、呟く様に感嘆の声を上げる。

「これが噂に聞く世界最大の城、レイクエント城か。」

アトルも振り返って見る。確かに壮大だった。目の前には高さ数十メートルの灰色の堅牢な城壁がそびえ立ち、その中央には観音開きの巨大な城門が見える。

左右に目を向けるとその城壁が延々とどこまでも続いていて、終わりがまったく解らない。上に目をやれば数え切れないうつもな高く高い塔が並ぶが見える。

どこをとっても今まで見たことのあるどの城よりも巨大だった。

話によれば、この城を建造するために、ザドウィル王国の殆どの国民が自主的に協力したのだというから、この国の結束の堅さが窺える。

「それでは、ランプの皆様。」ここで、召し使いの少年が三人の注意を引く。「これから、国王陛下の部屋へとご案内させていただきます。」召し使いはそう言っについて来るように促し、城門へと誘導した。

「なんだ、ここから直接東の港に行くのでは無いのか？」カーラが召し使いに尋ねた。確か、当初の予定ではそうなっていたはずだ。「国王陛下が、折角の異国からの客人を、挨拶もせずに行かせてしまうのは失礼だから、せめて少しでいいからあなたがたとお話がしたいとおっしゃるものですから。」召し使いが答えた。

「ですが、我々は早くエンリアルに行かないと・・・」アトルは焦ったように言う。エンリアルでは既に幾つもの村が被害に遭っているのだ。できるだけ早く行かなければ、また犠牲が増えてしまう。「しかし、国王直々の申し出を断る訳には行かんだろう。」ゼツタは仕方なさそうに言った。「それに、やつらが村を襲う周期から考えれば一分一秒を争う、という程の状況ではないようだしな。」

アトルもそれで承知したらしく、そのあとは何も言わなくなった。そして、一行はレイクエント城へと入った。

レイクエント城内部には、いくつもの中庭があり、昼の間は、その中庭から差し込む太陽光を随所に設置してある鏡に反射させることで建物内の明かりを得ているようで、奥まった部屋の中でも思いの外明るいようだ。

鏡を置く位置や向きの精密さを考えれば設置するのはかなり大変だっただろうが、設置が済んでしまえば、かなりエコノミーなシステムである。

特に、太陽光を噴水の水に反射させる技法は中々のものだった。噴水からの光は水の流れに合わせて揺れるため、幻想的に見飽きることがない。

しかし、噴水そのものは何で動かしているのだろうか。

しばらく歩いた後、一行はある木製の扉の前で立ち止まった。国王の部屋はおそらく城の中心にあるだろうから、城の大きさを考慮すればまだここが国王の部屋という訳では無いはずだ。

少ししてその扉が開くと、中にあつたのは飾りつ気のない小さな部屋だった。召し使いに中へ入るように言われた時は、ここできなにするつもりなのだろうとトランプはいかぶつたが、その答えはすぐに分かることとなる。

「それでは皆様、少し揺れますのでご注意ください。」トランプが中に入り終わった後、召し使いが忠告する。

「揺れる？ 一体どういうこと・・・」アトルが言い終わる前に、召し使いは部屋の奥にあるレバーを下に降ろす。

すると、突然部屋が大きく揺れた。揺れは数秒の間続いたがその後は軽く足元が振動する様な感覚になる。

「隊長、一体これは・・・？」アトルは反射的にカーラに聞いた。普段の癖でまずカーラに聞いてしまったが、流石に彼女でも初めてきた国のことなど分かる訳無いだろう、

そう思っていたら・・・

「これは、横向きのエレベーターのようだな。本物は初めて見たが・・・」カーラはあっさり答えて見せた。しかしスピルナはもちろん殆どの国ではエレベーターなど存在しないため、アトルにはカーラの言っていることが全く解らない。

「すいません隊長、エレベーターってなんですか？」アトルがカーラに説明を求める。

「要するに、この部屋丸ごと我々を運んでいるのだ。」カーラはそんなことも知らないのか、とでもいうような声で説明する。やはり最近のカーラはどこかツンツンしている。

「しかし動力がわからんな。一体このエレベーターは何の力で動かししているのだ？」今度はカーラが召し使いに質問する。

「海中に設置してあります巨大な水車でございます。」召し使いが答える。「この島の海中にある横穴に常に流れ込む特殊な海流で水車を回し、その回転エネルギーでベルトを引っ張り、それで滑車のついたこの部屋を引っ張っているのです。また、中庭にある噴水も、この回転エネルギーを利用して動かします。」

「ん・・・」アトルは分かったような分かってないようなだったが、要は城が広くて歩いて中心まで行くのはとてもなく大変なので、こうして部屋ごと外部からの力で運んでしまおうということのようだ。

「成程、海流か。中々面白い事を考えたものだ。島国ならではの発想だな。内陸国のスピルナでは思いつけない動力源、というわけだ。」とカーラ。何気に上から目線なのが気になるが、そこは触れない方がいいだろう。

「でも、スピルナにもこんなのがあればいろいろと楽でしょうね」「アトルはうらやましそうに言った。」「でも、そしたら何のエネルギーで動かすことになるんでしょうか。」

「そんなに言うなら、アトルが自分で動かせばいいだろう。」「ゼツタが冗談混じりに言う。」

「・・・そ、それはさすがに困ります。」何人もの人が入った部屋を一人で動かすなど、想像するだけで恐ろしい。

それから少しして、エレベーターはまた大きく振動して止まった。

エレベーターを出ると、そこはさっきいた回廊よりもさらに数段豪華な回廊であった。回廊の端に整然と並ぶ名の有る彫刻家が彫ったと思しき彫刻の数々は、明らかに国王の間が近づいていることを物語っている。

さらにそこをしばらく進むと、櫛の樹でできた重厚な門が行く手に現れる。門の脇には完全装備のいかにも屈強そうな衛兵が構えている。そして、門そのものに施されている執拗とも言える様々な飾り付け。

今度はアトルもカーラに聞く必要は無かった。

「ここが我等が国王、ザドウィル陛下の謁見室でございます。」

召し使いは説明したのち、右側の衛兵になにやら指示する。

すると、衛兵は頷いて、右手に持つ柄の長い矛の石突を地面に当たて大きな音を立てる。

どうやらそれが扉を開けるための合図だったらしく、数秒後、門は軋み音を上げて内側に開いた。

門の内側にあったのは、だだっ広い部屋であった。

しかし予想に反し、彫刻などの装飾品のない簡素な部屋であった。どうやら玉座は部屋の一番奥にあるようで、トランプはそこまで歩いて行った。

果たしてそこには、玉座があった。

そこに座るザドウィル王は、思いの外若かった。多めに見て三十分といったところか。紺色の瞳が特徴的である。

そして玉座の左側には一人の女性が立っていた。服はザドウィルの物と違って質素で飾り気がない。こっちの瞳は明るいブルーだ。歳は大体二十前後という感じだ。トランプの三人には、それが誰な

のか解らなかった。もし妃かなにかの貴人であれば、もっと豪華な椅子に座って、もっと豪華な服を着ているはずだ。ならば、彼女は一体誰なのだろう。

「スピルナ精鋭部隊トランプ、只今到着致しました、ザドウィル国王陛下。」カーラが言い、他の二人とともに国王の前にひざまづく。

「よしてくれよ、そんな。堅苦しいじゃないか。」ザドウィルは困ったように言った。その反応はとも一国の王の物とは思えなかった。「君達は通りすがりとはいえ立派な客人なんだ。なにもひざまづく事ないだろう。」

そう言うザドウィルの表情や声からは国王の威厳など微塵も感じなかった。

「はあ・・・」あのカーラでさえもこれにはどう対応していいかわからない。

「とにかく、まずは立ち上がって名乗りなさい。」ザドウィルはもどかしげに言う。

その言葉に一番に反応したのはアトルだった。

「僕は、スピルナ公アルデバラン・アルトの息子、トランプ戦闘員アトル・アルトと申します。」

「トランプ副隊長ゼツタ・ベルク。」次に短く名乗ったのはゼツタであった。

「カースナグ・ゴートの娘で、トランプ隊長のカーラ・ゴート。」最後に、カーラが名乗る。

カーラが名乗ったその時、アトルには一瞬ザドウィルの表情が一変したような気がした。しかしそれはほんの少しの間だけで、その後は元の少し頼りなげな人懐っこい表情に戻る。

「そうか。わたしは知つての通りザドウィル王国の国王、ザドウィル・オケアノスだ。最も、見ての通り国王などわたしごとときには過ぎた大役だがね。」ザドウィルは苦笑しながら言う。どこかおらかな所のある人当たりの良さそうな人だった。そして、左の女性

を指して続ける。

「それと、紹介するよ。彼女は、わたしの姪で、我が国の巫女でもあるクリヤだ。控えめな性格だが、よろしくたのむよ。」

クリヤと呼ばれたその女性は丁寧にお辞儀をした。三人もつられる様にお辞儀を返す。

「本当はもつと贅沢できるような立場なんだが、この国には巫女は質素でなければいけないという掟があるんだ。最も、クリヤはもともそういうことには興味がないみたいだがね。」ザドウィルが説明した。

口数が少ないのも、巫女だからだろうかとランプの面々は推測した。巫女というのも、スピルナには無い文化である。

「それで、君達はこれからエンリアルに向かう途中だそうだな。」ザドウィルが話を進める。

「はい。ご存知の通り、エンリアルにいる賊の討伐に赴く途中でございます。」ゼツタが返答する。実際、ザドウィル自身もテルフ同盟の会議には毎回参加しているのだから、知っていて当然である。「そうか。」それでもザドウィルはまるでそれが初耳であるかのように反応した。おそらくはランプと打ち解けるための軽い話題、という事だったのだろう。

「既にエンリアル各村が幾つも全滅の被害に遭っているそうだが、早く解決することを願っているよ。ところで、ここにはどれくらい滞在する予定なんだい？」

「それは・・・。」カーラは少し言いづらそうに言う。「折角ですが、エンリアルに現状を考えると、できるだけ早く行くのが妥当かと。」

「ああ、すまない。少し意地悪な質問をしてしまったね。気を悪くしないでくれ。君達としては今すぐにでも行きたい所だろうね。無論、無理に引き留めるつもりがある訳じゃない。」ザドウィルは慌てて謝る。

「ですが、一つだけお願いがあるのですが、よろしいでしょうか。」

「ふと思いついて、アトルが切り出す。カーラとゼツタも何を言うつもりかとアトルに注目する。」

「一つといわず、いくつでも言ってみなさい。」ザドウィルはいかにも役に立てて嬉しいと言うように急かす。

「エンリアルルの賊に関して、陛下の意見を聞きたいと存じます。」アトルが言った。

その言葉に後の二人も納得した。

「ふむ・・・望むならいくらでも力を貸すが、部外者のわたしの意見など当てにできないと思うぞ。」ザドウィルは少し困ったように答える。

「だからこそ、第三者であるザドウィル陛下のお考えを伺いたいです。それに陛下はトランプ派遣を決議した同盟会議の時その場にいらしたのですから、何か気付いたことがあればと思ひまして。」とアトル。

「なるほど・・・」感心したようにザドウィルが言う。「いいだろう。具体的に何が知りたいんだい？」

「それでは、例の賊の目的については、どう思われますか？」カーラが尋ねた。「現在解っている情報からすると、略奪が目的とは私には到底思えないのですが。」

カーラは賊の正体がアルカナであることはあえて口にしなかった。同じテルフ同盟加盟国とはいえ、所詮は他国。スピルナの精鋭部隊が同盟国で襲撃事件を起こしているなどという事が知れば、同盟間にどんな歪みが出るか分かったものではない。

いずれ明かされることになるとしても、今は下手には言わないのが賢明だ。

「たしかに、聞いた話では、荒らされた村でも物が盗まれた形跡などは無いそうだね。だとすれば、何らかの私怨か、もしくは・・・陽動と言ったところか？」ザドウィルは少し考え込んだ後に意見した。

「陽動・・・ですか・・・」その言葉にアトルは不意に不安を感じ

じ始める。

もし、このエンリアルでの事件が、アルカナがトランプをおびき出すために仕組んだ罠だとしたら……。実際、アルカナの全員がエンリアルにいるという保障はどこにもない。

もしこれが陽動だとしたら、その最終目的は間違いなくトランプのいない隙をついたスピルナの国家転覆だろう。

長く続いたスピルナ動乱が終わってやっと平和を取り戻してまだ間もないスピルナで、それだけは絶対にあってはならない。しかし、今スピルナに戻れば、アルカナはさらにエンリアルを荒らしつづけるだろう。それもまた絶対に避けたい。

ならば、どうすれば……。

「アトルさん、何も思い悩むことはありませんよ。」アトルの動揺を察してか次に言葉を発したのは意外にもクリヤだった。その抑揚のない透き通った声を聞いたとき、アトルはどこか心を見透かされたような気持ちになって、多少なりとも悪寒さえ感じた。

「ですが……」アトルは言葉に詰まる。実質的には、スピルナを取るかエンリアルを取るか、と問われているのと同じだ。悩むなと言う方が無理だ。

「ご心配なさらずとも、彼等は五人ともエンリアルにいますよ。それに、貴方のお父様が五人いるトランプの内三人だけを派遣したのもそのためでしょう？」落ち着き払った声でクリヤが喋った。その顔からは、感情と呼べる物は全て欠如している。

その言葉に今度はアトルだけでなくトランプ三人とも背筋に悪寒が走った。『ような気持ち』などではなく、本当に心を見透かされている事に気付かされたのだ。普通に考えて、アトルが何に関して悩んでいるのか、ここまでの確に予測できるはずはない。

そもそも、エンリアルからの報告では、賊は五人でなく四人となっているはずだ。

それだけでなく、派遣員を三人と決めたのがアルデバラン公であることまで、彼女は的確に言い当てて見せたのだ。

「よしなさい、クリヤ。」ザドウィルは、先程までの彼からは想像しがたい、静かだが強い口調でクリヤを止める。するとそれを聞いたクリヤはまるで白昼夢から醒めたように突然、顔に表情が戻った。

「すいません、ザドウィル様。アトルさんが困っているようだったので、つい・・・」クリヤは恥じ入ったように顔を俯ける。

「済まなかったね、君達。」ザドウィルが今度はトランプに向かって言う。「気にしないでくれ。これは彼女の癖でね、相手を混乱させることになるから、止めるように普段から言ってるんだが・・・」

「癖、と言うと、クリヤさんは・・・他人の心が読めるのですか？」アトルが尋ねる。

「いや、厳密には、そうではない。ただ彼女には、『預言者』の力があるのだよ。」ザドウィルが説明する。「簡単に言えば、占いに似た能力だ。まあ、実際はもつとずつと奥深い物なのだが、そのあたりのことを話すときりがないのでね。」

「『預言者』の力、ですか・・・」アトルはその言葉を反芻する。なぜか、論理的な部分ではなく、自分でも分らない心の奥底が揺さぶられるような感じがした。

しかし、それはともかくとして、もしクリヤの『預言』という能力によって語られていることが本当なら、アルカナは今五人ともエソリアルにいますということが分かった。それに、たえそうで無かったとしても、クリヤが指摘したもうひとつの言葉が意味しているのは、アルデバラン公が敢えてトランプを全員派遣しなかったのは、非常時に備えるためだと言うことだ。

それを考えれば、今自分達が行くべき場所は・・・。

「それで、彼女の言葉から何か分かったかね？」ザドウィルが聞いてくる。「クリヤの『預言』は、しゃべっている相手にしか分からないように要点だけしか言わないから、わたしにはなんの事を言っているのかさっぱりだが。」

「あ……」アトルはザドウィルのその言葉を聞いて現実引き戻される。どうやら、気付かない内に大分考え込んでいたらしい。「ええ、おかげさまで、必要なことは解りました。僕達は、できるだけ早くエンリアルに発たせていただきます。」

「そうか……それはよかった。」ザドウィルはどこか残念そうに言った。「東の港の船の用意は既に済んでいる。いつでもエンリアルに向けて出られるようにさせてあるよ。またエレベーターに乗ることになるから、オルに案内させよう。」

そう言っただろザドウィルは、手を数回叩いて、部屋の外に待たせていた先程の召し使いの少年・オルを呼び出した。

「それでは、お暇させていただきました。」カーラがそう告げて、三人は頭をさげた。

「そうだ、もう一つ……」トランプの帰り際にザドウィルが呼び止める。「万事済んだ後には、またいつでも来てくれたまえよ。君達とはもつとゆっくり話がしてみたいからな。」

その言葉に、アトルはもう一度頭を下げた。しかしその実、今のアトルの頭の中は迫る恐ろしき船酔いの予感でいっぱいであった。

四章に続く

第四章 「決戦の火蓋」

今から十二年前、今のスピルナ公国に当たる地には、スピルナ帝国があつた。

世界の中心に位置するために、周囲の国や島からの移民が国民のほとんどを占めるスピルナ帝国を治めていたのは、その中で唯一の先住民であるゴート一族であつた。

そのスピルナ帝国の最後の帝王となるカースナグ・ゴートには、カルダと言つ一人の皇子と、その妹である一人の皇女・カーラがいた。

――十二年前・ファンタスマ城――

「お兄ちゃん」その少女は回廊をスキップしながら、大好きな兄を呼ぶ。その楽しそうに輝いた目には、この世のどんな悪も災難も映つてはおらず、まるで完璧な平和の楽園に生きているかのような目であつた。

「どうしたの、カーラ。ずいぶんと楽しそうだけど、何か良いことでもあつたのかい？」ちょうど回廊の横道から出てきた兄・カルダはカーラの純粋な笑顔に微笑みかえす。

「だって、今日はお休みの日で、めんどくさいお稽古とかお勉強とかがなくて、その上お兄ちゃんと一緒に遊べるんだもん。楽しくないわけないじゃない」カーラは心の底から嬉しそうに言った。

「それじゃ、きょうは何して遊ぶ？」

「カーラは何がいい？」カルダが尋ねる。

「んーそうだなあ・・・それじゃあ、かくれんぼ！お兄ちゃんが鬼ね」カーラはそう言つて間髪入れずにカルダから反対側へと回廊を駆けて行く。

カルダはなにも言わず、顔を壁側に向けて目をつぶり、カーラがより遠くに逃げられるように、ゆっくりと数を数えはじめた。

このファンタスマ城での生活で、カーラが不満に思いうることなど何も無かった。

もともと才能があつたカーラにとっては、平民の物とは桁違いな英才教育もなんら苦にはならず、食べるものも、着るものも、全てにおいて何一つ不自由することはなかった。そして何より、優しくおおらかな完璧な兄がいてくれるかぎり、カーラがその笑顔を失う要素などあるはずは無かった。

当時のカーラは、この生活が無くなることなど、考えた事もなかった。

それほどまでに、その頃のカーラにとってその世界は、完璧でゆるぎない物だった。

しかし、カーラが信じたその世界は、長くは続かなかった。

自分の敬愛すべき父親、カースナグ・ゴートが極度の独裁者であつた事を、カーラは知らなかった。カーラのその素晴らしい生活が、不当に国民に課せられた税金のおかげで成り立っていたことを、カーラは知らなかった。そのために国民の間で一揆の計画が進んでいたことも、カーラは知る由もなかった。

それは、突然であつた。

リベラと呼ばれる反乱組織が時間をかけて作り上げた緻密な計画のために、ファンタスマ城に爆弾が仕掛けられていたことに帝王側の人間は直前まで気付くことが出来なかったのだ。

その日、壮大な爆音とともにファンタスマ城はあえなく陥落し、カースナグは崩御、運よく生き残つたカーラは捕虜として囚われの身となつた――

その瞬間、カーラは目を覚ました。

目を開くとそこは、ザドウィル・エンリアル間にトランプが乗っ

た船の、カーラにあてがわれた船室だった。カーラは、その壁に据え付けられているベッドに横たわっていた。海側に開いた窓からは、海と空の見分けも着かないような夜中の暗い景色が広がっている。

なぜ今更あんな昔の頃の夢を見たのだろうか。いや、その理由は既にカーラには分かっていた。

少なくともあの先の出来事を見る前に起きたのは、ある意味では幸いだったかもしれないと、カーラは思った。

手の甲を額にあてて、カーラは気持ちを落ち着けようと深呼吸をする。

あの日から、カーラと、そしてスピルナの運命は狂いはじめた。

現在こうしてスピルナが平穏を取り戻しているのは、あの頃からしてみれば奇跡のような物だ。

ファンタスマ陥落を境に、スピルナは常に争いが絶えない無法地帯となった。と言っても、その争いの原因は、ゴート一族では無かった。

リベラは、いくつもの部族の内、その場の感情に左右されやすい若い世代の人間が立ち上げた組織であった。彼らの目的は、ゴート一族に対する反乱のみであり、その先に何が起きるかなど、彼等は考えもしなかったのだ。

圧政であったとはいえ、それまでのスピルナ帝国はゴート一族を中心に一応の秩序とまとまりを持っていた。そこからリベラは、無作為にその中心を奪い去ったのだ。当然、まるで幹を失った大木の如く、スピルナの秩序は崩れ去った。

どの部族も、次の支配者の座を求めて、互いにいがみ合い、各地で紛争が勃発し、それはついには巨大な内戦へと発展した。

それが、夥しい犠牲者を出したスピルナの負の歴史、「スピルナ動乱」である。

ふと、カーラは自分が感慨に耽っていたことに気付く。

明日には遂にエンリアルに到着するのだ。来るべき戦いに向けて寝不足にならないように、今のうちに出来るだけ眠っておかなくて

は。

カーラは心の中でそう呟いて自分を戒めて、スピルナ動乱のことを無理矢理頭から払いのけた。

カーラがトランプに入隊するためにこれまで努力してきたのは、スピルナ動乱のような悲劇を二度と起こさないようにしたかったからだ。

なのに、こんな所で呆気なく死ぬ訳にはいかないのだ。

例えその敵が、あのアルカナであろうとも……。

―エンリアル王国・ネアス村周辺―

「ねえ、エータ。」中央に焚かれた焚火の淡い光の中、パルトが発したその声は、もはや呼び掛けというより寝言に近かった。

そこは、“例の賊”に最後に被害をうけたネアス村の近くの雑木林である。さすがに肝が座っているエータでも、皆殺しに遭ったばかりの村の中に野宿する気にはなれなかったようだ。

今日一日中、その村（の跡）で情報収集を続けたのだが、結局“賊”の正体に関する証拠はなに一つ見つけれなかった。言い換えれば、相手は証拠隠滅のプロでもあるということだ。

やはり、ただの賊ではない。

「なんだ、パルト？」地面に座り込んでいるエータは短く答えるが、その集中力はほぼ全てエータ自身の考え事の方に注がれていた。「何もこんな真夜中までそーやって考え込む事ないじゃん。」パルトはどんなときでも眠そうな半閉じの目でエータの横顔を見つめる。

「別に寝たかったら先に寝てていいんだぞ、パルト。」そんなパルトの声に対して、エータの声からは眠気など微塵も感じ取れない王子として普段から鍛えている成果、というよりは、夜の間によからぬことをするために自然に身についたスキルだ。

「そーゆーことじゃなくて、なんだかエータがそーやって考え込

んできると、気になって眠れないんだよ。」「パルトは不満そうに言った。「そもそもぼくが、『寝ていいかどうか』なんて気にするはずないでしょ。」「

「自分で言うなよ、バカ……。」「エータは改めてパルトという存在そのものに呆れる。

「ところで、さっきから何をそんなに考え込んでるの？」「パルトは何気なく尋ねてくる。

「お前、どうせ俺が話してる途中で寝るだろ。」「しかしパルトの本性を知っているエータは冷たく突き放す。

「……。だって、エータの話で長ったるくてつまらないから、少し聞いてればすぐ寝れるもん。」「パルトはいつもの間延びした声で言う。

「パルト、お前……。まさか、俺の話を子守唄がわりに使おう、なんて考えてないよな。」「エータはまさかと思っただけで聞いてみる。そしてパルトに対してのまさか、というのは間違いなく、と言うのと同じである事は、この長い付き合いの間にエータはとくに学習していた。

「……。だめ？」「パルトは悪びれもせずそう言った。

「だめ。」「エータはまたもや冷たく突き放す。

「うう……。それじゃぼくどうやって眠ればいいの？」「パルトはそう言っただけで頭を抱える。

「知るか！自分で考えろ！」「今のエータは、そんな程度のことですら悩んでいられるパルトがうらやましいくらいなのだ。

「それでも、ぼくの事はともかく、考えてることを一度口に出して見れば何か解るかもしれないよ？」「パルトは何気なところで正論を述べる。

「……。つたく、しょうがねえな……。」「ここでエータも遂に折れた。そして話し出す。

「とりあえず、まずは今の状況を改めて整理する。

エンリアル王国で例の賊の被害が初めて出たのは今から丁度九日

前。

場所はエンリアル西部のショウラ村。実質的な被害は殆ど無く、どちらかというところエンリアルやテルフ同盟に対する牽制と言ったところか。

その後は約一日おきに別々の村を襲い、幾つかの村は全滅している、と部下の報告では言っていたが、昨日今日の俺達の調べによると、どの村でも最低数人の人間が生き残っていた。

それも、襲撃があつた時にまさにその場にいたにも関わらず、なぜか攻撃を受けなかったらしい。

おそらく、賊は自分達の存在をあえて知らしめようとしたんだろう。理由ははっきりとは分からないが、そのあとのテルフ同盟の動きを見れば、ある程度は予想がつく。

すなわちトランプの派遣だ。もしあの賊の正体がアルカナであるなら、スピルナにしか分からないように自分達の正体を知らせて、トランプをおびき寄せた。という見方もある。

しかし、一番の問題はやつらの目的だ。同じスピルナに住むもの同士が、なぜわざわざエンリアルでそんなことをするのだ？

エンリアルにやつらの求めるものが何かあるというのか？それに、そもそもトランプをおびき出そうとする理由は・・・？」

ふと、左隣のほうからいびきらしい物が聞こえ始めたようだが、エータは努めて聞こえぬ振りを決め込んだ。

「・・・くそっ、やっぱりこしく考えんのは苦手だ！」エータは遂に弱音を吐く。だんだんとエータの脳みそが限界を迎えはじめたのだ。普段ろくに使っていないくせに今日一日フル回転させつづけたせいで、今やオーバーヒート寸前である。いつもデユオに「もつとちゃんと勉強しなさい」と言われ続けたのを無視した結果である。

「あーもう、あっちの方からひよっこり出てきてくんねーかなあ、つたく。」

そんな事を虚空に向かってばやいたところで、何の解決にもなら

ないことは、エータも分かっているが、これ以上この問題を考えつづけるのは、エータの脳のスペックでは不可能だった。

いや、エータが本気になればまだ頭脳を働かせ続けることはできただろうが、その場合の問題はむしろ集中力の方である。

エータは半ば諦めたように仰向けに倒れる。その時、偶然そばの木にたてかけてあった金色の槍、エイレアが目に入る。何気なくエイレアを手に持つ。すると、不意に、エータの頭に過去の記憶が甦ってきた。

それはエータが十歳のころ、正式に王位継承者として認められた式典の後に、父親であるアエトレスに、自室に呼ばれた時の記憶だった。エータが父親に用は何かと尋ねると、アエトレスはこう言った。

「エータ、お前がわしの後継ぎとして正式に認められた今、お前にこの聖槍“エイレア”を托そうと思う。」アエトレスはそう言つて赤い絨毯の敷かれた部屋を横切り、壁に掛かっていた槍を手にとる。その槍の柄は金色の神々しい輝きを帯び、装飾のある石突きと三又に分かれた穂先は銀色だ。その長さはゆうに2メートル半はあり、当時のエータの身長の倍近くあった。

「だがなエータ。もしお前がこれを受け取るならば、相応の覚悟をしてもらわねばなんのだ。」そう言うアエトレスの表情は、心なしか悲哀を含んでいるようにも見える。

「覚悟・・・ですか、父上？」エータは、その美しい槍にいつまでも見惚れていたという衝動を押さえ付けつつ、聞き返す。

「そうだエータ。このエンリアル王国が、三千年前に栄えたイクイア文明の技術を受け継いでいるということは、すでに知っているな？」

「はい、父上。」エータは、今の話の関連性を訝しみつつ答える。
「実を言つと、我々レアロス家は、黄金王と呼ばれるエリユアル

ス王が崩御し、イクイア文明が滅び、すべてのイクイア人が死に絶えた時に、唯一生き残った三人の人間の一人、エアセイラ・レアロスを祖としているのだ。

伝承によれば、イクイア滅亡の折に生き残った三人は、それぞれ名をエアセイラ、アルクトウルス、カースローダといい、イクイア王国の貴族であり、エリユアルス王にもっとも信頼される臣下でもあった。

その頃のエリユアルス王は、イクイア文明に終末が近い事を悟っていた。どんなに素晴らしい文明であっても、いや、どんな文明よりも素晴らしいイクイアだからこそ、いずれは必ず己の炎に焼かれ崩壊する、それが避けられぬ運命であると気付いたエリユアルス王は、イクイア文明の遺産を後世に遺すために、その三人にそれぞれ役目を与えたのだ。

その時に、エアセイラに与えられた役目こそが、イクイア文明の技術力の継承だったのだ。また、それと共に、エアセイラはイクイアに伝わっていた三種の神器の一つ、聖槍“エイレア”を受け継いだのだ。」そこまで言ってアエトレスは一息つく。エータは何も言わず、ただじつと父親の話を聞いている。

「よいかエータ、この槍はただの槍ではない。未知の金属で作られていて、決して折れることも、傷付くことも、刃こぼれすることもない。その切れ味は、この世のどんな刃物よりもよい。それだけならばただの素晴らしい武器だがな、この槍には、同時に恐ろしい面もあるのだ。ちょうど、強い日の光の下にできる暗い影のようにな。」

エータは、その言葉の意味をはかりかねて首を傾げる。そんな無邪気な様子のエータをみて、アエトレスは彼らしくもない大きなため息をつく。

「・・・言い換えればこの槍は、太古から今までの長い長い年月、折れることも、傷付くことも、刃こぼれすることもなく、敵を刺し、その心の臓を貫き、血を浴び、命を奪ってきたと言うことだ。これ

には、そうして命を断たれた者共の恨みや怨念が染み付いている。そう言った負の一面があるのだ。

だが、我等レアロス家はたとえ何があろうとも、この槍と、そしてイクイア文明の誇りを受け継がねばならぬ。それが、三千年の昔より、我等に定められた運命なのだ。

だから、お前がこの槍を持つかぎり、お前は強く在らねばならぬ。もしお前が弱みを見せれば、エイレアはそこに付け込み、お前を支配するだろう。エイレアがもし、お前を主と認めなければ、お前の投げた槍は、逆にお前を突き刺すだろう。

まだ幼いお前に、この重荷を背負わせるのは、本当に辛い。だが、もしお前が正しい覚悟を持ってこれを握るのならば、この槍はお前を主と認めるだろう。」そう言つてアエトレスは、エータにエイレアを差し出す。

エータはつられるように、おそろおそろその金色の槍に手を伸ばす。そして、遂にその手がエイレアに触れた時、突如槍は一瞬、まばゆいばかりの金色の光を放った。そのあまりの眩しさに、エータは左腕で目を庇った。

やがてその光が消え、エータは左腕を下ろす。

そして、右手ににぎられているエイレアに目をやる。

2メートル以上もあつたはずの聖槍“エイレア”は、気がつくとも1メートル半ほどに縮んでいた。それは当時のエータにとってぴったりの大きさだった。装飾も前ほどまばゆい物とは違い、落ち着いた節度のある物に変わっていた。また、穂先は逆に数センチ長くなっている。柄は多少細くなり、ちょうどエータのためだけに調節したかのように、手にしっくりとくる。

エータが突然の事におどろいていると、アエトレス王は、それが、エイレアの一番の特徴であるのだと説明する。

エイレアは、己の主と認めた者に合わせて、その姿を変え、認められた主にのみ従うのだという。また、主が成長するに合わせて、エイレアも変化していくのだそうだ。

言い換えれば、今、この瞬間、エイレアはエータを主と認めたのである。当時まだ幼かったエータにも、それが意味する事は本能的に分かった。

そして、アエトレスはやつと何かの枷から解放されたかのように、体から力を抜き、肩を落とす。

「さすが、我が息子だ、エータ。だが、今言つた事を決して忘れてはならぬぞ。お前は強く在らねばならぬ。付け入る隙を与えれば、これはお前を破滅させるかもしれんのだぞ。」

アエトレスのその言葉に、エータは強い畏怖を持って、今は自分の物となつた聖槍“エイレア”を見つめていた。

ふと、前触れなくエータは現実に取り戻される。

なぜ、突然あんな出来事を思い出したのだろうか。もしかすると、これもエイレアに秘められた神秘的な能力の一つなのかも知れないと、ふいにエータは思った。エイレアが、弱音を吐いた主人に、忠告しているのだろうか。

エイレアは、エータの心に隙ができたのを、感じとっているのか。しかし、もしエイレアがエータを狙っているなら、わざわざ忠告などするはずがない。

むしろ、エイレアはエータを励まそうとしているような感じさえした。一体、どういう事だろうか。しかし、今のエータにそれを難しく考える余裕は無かった。

「・・・そういえば、エータあゝ。」突然、予想外なことにパルトが口を挟んできた。

「なんだ？」エータが短く尋ねる。パルトは普段はご覧の通りの寝ボスケだが、曲がりなりにも竜族の一員であり、本人が表に出さないだけで、潜在的な知能はかなりの物である。自分からしゃべり出すくらいだから、聞く価値はある。

「今日一日ずっと被害に遭つた村を回つてたけど、あれってたし

か一直線になつてたよね。どしてだろね。」

「・・・あん？それどーゆー意味だ？」エータが聞き返す。昼間の移動中は、本来の姿、すなわちドラゴンに変化していたパルトに乗っていたので、被害地の位置関係など気にも止めてなかった。

エータは荷物の中からエンリアルスの地図とペンとインクを取り出し、消えかかった焚火の光の薄明かりの中で確認する。被害地の場所にペンで点を付けていく。

すると、エンリアル本島であるリアナ島の上に、南西から北東に向かう一筋の線が浮かび上がった。

「ホントだ！パルト、お前何で今まで言わなかったんだよ！」エータは勢いこんで言う。

「・・・そんなことも気付かないエータの方がおかしいでしょ。相変わらず頭悪いんだからあ。」しかし対するパルトはあくび混じりである。

「てめえ、やる気か？・・・って、そんなこと言ってる場合でもねえか。」

ツレないな、とヒマそうにぼやくパルトをよそに、エータは自分の作業に戻る。

ふと思いつき、地図上にできた直線に被害のあった日付を書き足していく。すると、村から村への移動距離と、移動にかかる日数とが比例していることが解った。駐留軍の手をことごとく逃れ続けているようなやつらが、そんな分かりやすいヒントを残すはずがない。これは敢えて残したヒントか、畏かのどちらかだろう。そのどちらにしても、この線に沿って進んでいけば、なにかやつらの事が解るはずだ。あわよくば遭遇できるかもしれない。

そして——次にそのラインに当たったのは、ここから十数キロ北東にある、テラールという村だった。

「おっしや、そうと決まればすぐ行くぞ！さっさと起きろ！パルト！」エータは、たったの数秒間で熟睡を始めかけていたパルトをたたき起こす。

「・・・やっぱりそーなるの？だから言いたく無かったんだよ。」
「パルトはそう毒づきつつも、仕方無しのようにのろのろと準備を始めた。」

―テラール村より南西に数百メートルの地点―

「ふぁゝあ・・・。」岩に寄り掛かって寝転ぶヴァイスはいかにもヒマそうな欠伸をする。そこには、ヴァイスを含めて五人の人間がいた。

「こら、ヴァイス、お前はもつと緊張感という物を学べ！」それに対し近くの長身の男が注意する。男の方も、大分眠そうではあったが、部下の手前で弱音を吐く訳にもいかずに、その手に持つ、男の背丈よりも長い棒を支えにして何とか眠気を押さえていた。

「そんなこと言ってもよぉ、トランプのやつらもエンリアルルのやつらもノロマすぎて、いかんせん待ちくたびれたぜ。」ヴァイスは愚痴をこぼす。

「だからといって、気を緩めていいという言い訳にはならんぞ。そもそも我々は・・・。」

「その辺でやめとけ、バード。」突然、男の左側から声がする。

「エンリアル組の二人は今こっちに向かっているし、トランプも明日にはエンリアルに到着するのだ。むしろ今のうちに休んでおいの方が良い。」

声の主は、長めの黒髪の青年だった。歳はおおよそ十八歳くらいで、ずば抜けて長身なバードの横だとまるで子供のようにも見える。しかし、その存在感は、彼がただ者ではないことを如実に顕していた。現に、彼が少し喋っただけで、バードもヴァイスも眠気が吹っ飛んだ様に緊張して背筋を正したのである。

特にヴァイスのような奔放で怖いもの知らずな男を、これほど緊張させるのだから、相当なものである。

「ボス、それじゃあ、ついにあいつらとの決戦が近いということ

「？」さらにその青年の隣にいた少女が言う。それは、まるで幽霊のような暗くて冷たい雰囲気を纏った少女だった。

「まあ、そう言うことだな、ナラカ。」ボスの青年が悠々とした声で答えた。

「今までの俺達の地道な努力が、ついに実を結ぶ時が来たのだな・・・。」最後の一人、真つ黒なマントを羽織った男が、つぶやくように言った。

「・・・おいおいエスト、お前が偉そうにゆーなよ。そもそもアレを仕掛けたのはオレなんだぜ？」ヴァイスは唸るように愚痴を言う。「アレやるのにどれだけオレが苦労したと思ってる。」

「フン、あれしきの事で苦労する様ではまだまだだな、ヴァイス。」エストのその安い挑発に、単細胞なヴァイスはすぐに乗っけてしまふ。

「んだとてめえつ、やる気か！？」バードが咄嗟の機転で制止に入らなければ、恐らくヴァイスは本当につかみ掛かっていただろう。「落ち着け、ヴァイス。」そこで青年が放った一言で、ヴァイスはまたもや硬直させられてしまふ。

「さつきも言った様に、今は体力を温存することだ。」喋りながら青年は手の平大の球体を、懷から取り出し、他の四人にも見えるようにそれを掲げた。

傷一つ無いその球体はまるで夜空から星を取り除いたかのように暗く、澄んで、透き通っていて、中心からゆらゆらと淡い光を放っている。その光は、見ていると何故かどこからともなく力が沸いて来るような感覚に包まれるが、同時に見る者をその球体の世界にとり込み、全てを無に戻してしまいそんな気もする、様々な意味で畏の念を抱かせる、不思議な光だった。

それを見た瞬間、アルカナ一同はさらに顔を引き締めた。

「・・・もうすぐ始まるのだ。」青年はその光に魅入る様にして言った。「我等の計画の最終段階が・・・『第二次スピルナ動乱』が・・・」

そして、我等アルカナの時代、『新生・スピルナ帝国』が！」

五章に続く

第五章 「運命の齒車」

トランプ―その言葉を聞くと、まずカードゲームのトランプをイメージする人は大多数を締めるだろう。

しかしその実、カードの事をトランプと呼ぶのは日本人のみである。その言葉の語源は、別のところにあるのだ。

それは、『切り札』。カードゲームにおける、必勝の一枚のことである。

今回の場合の、スピルナ精鋭部隊・トランプという名前も、そこから来ているのである。

すなわち、スピルナ公国を表から治める切り札という意味である。それ故に、トランプに所属するものには、王侯貴族の様に高潔で、スピルナ国民の規範であり、そして強くあることが求められるのだ。

―時は遡り、カーラ達の出発直後 スピルナ公国 フェルメ・エト
ワル城―

見るからに高級そうな赤い絨毯の敷かれた、石作りの長い回廊。天井までの高さだけでも5メートルはありそうだ。

その奥にある、高さ3〜4メートルもある大きな扉の前で、二人の人間が手続きが終わるのを待っていた。

しばらくの無言の時間の後、扉を守る兵士の一人が口を開いた。

「―ただいまアルデバラン・アルト公よりの許可が下りました。

それでは、スピルナ精鋭部隊トランプの諜報隊員・ソルグ・ライアル殿と、同じく救護隊員・シフォン・ラエーナ殿を、アルデバラン・アルト公の謁見室へお通しします。」兵士は大仰にそう言うと、複雑な形をした大きな鍵を取り出し、扉の鍵穴に差し込む。

その口調と動作はまるで機械のように完璧で、非の打ち所が無かった。

鍵が回るに合わせてガチャンと音がなり、鍵が開いたことを伝え

る。

その大きな扉はゆつくりと観音開きに開いたが、流石に完成してまだ少ししか経っていないこの城の扉は、見事に軋み一つ上げない。「……つたく、分家だろうが持ち前の几帳面さは変わらずだなあ、アルト家つてのあ。」ソルグは悠々と歩きながら冷やかす様に言う。

彼が言っているのは、先ほどの兵士の事である。知っている人が見るからこそ気が付く事だが、あの兵士はアルト家の分家の出なのである。

普通の国でなら、統治者の親戚ともなればそれだけで、大臣のような極上の地位を与えられるものだが、この国はその平等主義ゆえに、たとえアルデバラン公の親類であろうとも他の国民と同じように一兵卒から手柄を立てて出世しなければならない。

例えばあのアトルでさえも、始めは平民となんら変わらぬ一人の兵士として、軍の戦闘部隊に入隊したのである。

トランプでの今の地位も、実績を認められて昇格したに過ぎない。しかし、ソルグの言葉に対し、シフォンは何も答えない。

「……シカトかよ。相変わらずつねねえヤローだな、シフォン。」ソルグは大きくため息をつきつつ言う。それに対してもシフォンは清々しいほどに無言。ソルグはその後何度か喋りかけようとするそぶりを見せたが、結局諦めたようにそっぽをむいた。

そして二人は部屋の奥にある豪華な机の前にたどり着く。その奥の壁にはスピルナの国章を刺繍したタペストリーが掛かっている。

「よく来ましたね、ソルグ、シフォン。」椅子に座った男がいたって気軽な声で話し掛ける。座った状態からでも分かる長身に、少し長めの艶のある髪。すでに四十歳を越えているはずなのに、ほとんど老いを見せてはいない。

落ち着いた蒼い眼は、しかしまるで心を見透かすかのような眼光をたたえている。

絶えず微笑みを崩さない、いかにも高貴な風格を備えたこの男こ

それが、スピルナ公アルデバラン・アルトである。

「アルデバラン公、ソルグ・ライアル、ただいま参りました。」
ソルグは形式どおりに挨拶をしたが、シフォンはそのそぶりすら見せない。ソルグはその無礼千万ぶりに顔をしかめるが、アルデバランはまるで気にしていないようである。

「二人とも、突然呼び出したりして申し訳無いことをしましたね。」
「アルデバランは続ける。」

「しかし、今回ばかりは急を要する事態なのです。」

「・・・と、言いますと・・・？」と先を促すが、実際のところソルグにはその答えはほとんど予想できていた。

「・・・アルカナです。」アルデバランは重々しく答える。そしてその答えはソルグが予想した通りであつた。

「やはり・・・何か、動きがあつたのですか？」ソルグは続けて尋ねる。アルカナが行方不明になっている事が分かつてからずっと懸念していた事だつた。

「はい。知つての通り、エンリアルにいる彼等の事は、カーラ達に任せていますが、それとは別にあなた達にもやってほしい事があるのです。」そう言つてアルデバランはふたたび微笑んだ。

―現在・エンリアル王国 テラール村付近―

（・・・いたぞ。あいつらがアルカナか？）叢に隠れて慎重に様子をつかがいながら、エータは隣にいるパルトに尋ねる。

むろん、声を出して尋ねた訳ではない。エータとパルトが今使っているのは、特殊な手話である。敵に感づかれないために手の動きを最小限に抑えられるように単純化した物で、語彙は少ないがある程度の日常会話はできる。

エータ達の見つめる先、叢からハメートルほど離れた場所には、アルカナの五人がいたのである。

エータとパルトは、昨夜テラール村に向かって飛び立ち、数時間

かけて搜索した結果、アルカナの五人が野宿しているこの場所にたどり着いたのである。

（・・・多分そうじゃない？だって、地竜の谷に居た人がいるもの。）パルトは、手話を通じてさえ分かるほどにめんどくさそうに答える。パルトが言っているのはヴァイスの事だ。

（多分ってなあ・・・まあ、お前が言うならそうなんだろうが・・・。）エータは半信半疑で答える。

（だが、そういうことなら、さっさと行くぞ、パルト！）エータは意気込んで聖槍・エイレアをにぎりしめる。

自分の国（将来的に考えると）の国民に害をなす、許すべからざる悪に正義の鉄鎚を下す、そんな気持ちも無いではないが、一国の王子らしからぬ喧嘩好きな性格であるエータにとっては、それほどまでの強さを持った敵と戦う、という目先の事実の方が、よっぽど血をたぎらせていた。

（ええ～～・・・。なんでばくも行くみたいになってるのぉ？）しかしパルトは完全にやる気ゼロだった。

（なんで・・・って、お前・・・）エータは呆れて言った。（そりゃねーだろ、せつかくここまで来たつてのに。お前、あいつらと戦ってみたくねーのかよ！）

（そんなこと考えるのなんて、エータだけだよ。だいたい、ぼくはエータと違ってエンリアル王国には何の義理も無いし。ここまで付き合っただけでもありがたく思ってもらいたいよ。）パルトは大きな欠伸をしながら言う。

エータはそれには反論できなかった。実際、パルトが言っているのは正論だからである。しかし、エータはこういう時のための秘策を持っていた。

（・・・今度、高級ロースハムおごってやるから――）

（よし、すぐ行こう！）

（・・・）エータは、自分がこんな単純バカとよく今まで付き合っただけだと思わずにはいられなかった。

「そろそろいい加減に準備を始めろ、ヴァイス。」バードが急かすように言う。「今日はこのすぐ先にあるテラール村を潰すのだ。我々の偉大な計画に穴を開けることは許されないのだぞ。」

「でもよお、そもそもなんで俺達はどうやってエンリアル村を潰してかなきゃいけないんだ？トランプをおびき出すって目的は、すでに充分達成してんだろ？」ヴァイスはいつも通りの気の抜けた声で言う。

「お前、何もわかってないな。」エストが静かな声で言った。「トランプをおびき出すことなど、本来の村潰しの理由のついでにすぎん。」

「そうなのか？じゃあ、ホントの目的ってのは？」

「貴様、よくそれで今まで我々と共に戦って来れたな。」バードは驚いたように言った。ヴァイスが作戦の詳細に興味が無かったのは知っていたが、まさかこれほどとは。

「・・・まあ、それぞれの理由はともかく、最終目的は俺達全員同じだからな。俺は一族の仇がとれんならそれでいいんだよ。」

「まったく、貴様らしい。」とバード。「いいか？ヴァイス、我々が村潰しをしている理由は・・・生け贄のためなのだ。」

「い、生け贄？いったい何のために・・・」

「おい、お前ら、静かにしろ。」ここで唐突にリーダーの青年がヴァイスを止めた。

「・・・来るぞ。」青年のその一言に、一を聞いて十を知ったアルカナの四人は素早く反応し、戦闘体勢をとる。

突然、五人の後方から、一筋の金色の閃光が走る。アルカナは左右に分かれてそれを避ける。五人がさっきまで立っていた場所の地面に突き立ったそれは、金色に輝く槍だった。

すると、間髪いれずに一行の左手のしげみから、金髪の青年が飛び出し、その手に持った長い金色の槍でバードを突く。しかしバー

ドはその手に持った鉄製の棍をグルグルと回すことで、巧みにそれを避ける。

それからバードは襲撃者との間に距離を取ろうと二歩後ろに下がり、棍を構え直す。

一同の注意がその青年・エータに注がれる。彼の手にある、バードを突いたその槍は、ちょうど先ほど飛んできた物と同じだった。見ると、さっきまで地面に刺さっていたはずの方の槍は、まるで魔法で消されでもしたかのように忽然と消えていた。

「てめえ、何モンだ！」ヴァイスが威嚇するように唸る。しかしエータはその質問には答えず、ただ一言、

「バーカ。」とだけ言い放つ。

それが合図であつたかの様に、次の瞬間、アルカナ一同の後方、エータの居る側の反対側から、もう一つの影が飛び出して来た。

その足の速さは人並みはずれていて、その姿をはつきりと見極める事すらできないまま、襲撃者はアルカナに襲い掛かり、ちょうど最も近い位置に居たエストにぶつかってゆく。しかしエストは一瞬で状況を判断し、目にもとまらぬ速さで腰の剣を抜き、逆に影の方に切りかかる。

しかし、刃は襲撃者の右腕に直撃したにもかかわらず、まるで鋼鉄の棒に切り付けたかの様に逆に弾かれてしまう。

襲撃者はそのまま右腕を振り、エストにつかみ掛かる。エストは辛うじて後ろに身を引いてかわすが、右頬に一筋の赤い線が走る。そのままでは反撃を喰らうと判断した襲撃者も、ひとまず引いて距離をとる。

そこまで来てやつとはつきりと見えた二人目の襲撃者の正体は、パルトだった。

その右腕は、通常よりも巨大化し、明るいオレンジ色の鱗に覆われ、四本の銀色に輝くカギ爪が生えている。

その姿はまるで、人間としての身体の内、背中から生える翼と右腕だけがドラゴンになったかの様だ。

こうして、アルカナは前後を襲撃者で挟まれる形となった。

「フン、ようやく来たか、エンリアル王子よ。」リーダーの青年は突然の襲撃にも全く動じず、静かにそう言つて、その漆黒の瞳を妖しげに光らせる。

「・・・テメーが親玉か？」その青年のただならぬ雰囲気を感じとつてエータが問う。

「いかにもそうだ。」青年は冷水を思わせる冷たい声で言う。「オレがスピルナ公国精鋭部隊アルカナの隊長、カルダ・ゴートだ。」

―エンリアル王国・首都ファラドーナ―

別名「芸術の町」とも呼ばれるエンリアルの城下街・ファラドーナ。この町から生まれた芸術は、絵画や彫刻、金属細工、文芸、歌踊りなどどれもが他を圧倒する一級品であることは、エンリアルとの交易関係を持っている国の全てが認めるところである。実際、ファラドーナの産業のほとんどは芸術が占めている。

近頃では、エンリアル出身者だけではなく、ゼンロ大陸やザドウイル王国からも、その芸術を学ぶためにはるばるやって来る修業者が後を絶たない。

そんなファラドーナの街道を馬車で移動すれば、これからの戦いに向けて緊迫しているべきである筈のトランプ一行の気持ちも少しはほぐれようというものだ。馬車は二人乗りで、一台目にはカーラとアトル、二台目にはゼツタが一人で乗っていた。

「それにしても、本当に美しいな、この町は。」馬車の心地良い揺れに身を任せながら、カーラが感心するように言う。「まるで町そのものが一つの巨大な芸術品のようだな。」

そんなカーラの批評はかなりの的を射ていた。実際、整然と並ぶ、

茶色と白を基点とした色とりどりの美しい家々や、隙間なく並べられた灰色の石畳の街道、広場毎にある涼しげな噴水は、どれを取っても芸術と呼ぶにふさわしかった。「芸術の町」という異名もまた、町そのものの芸術性を表している。

「それはいいですけど、何と言うか、呑気なものですね、ここの人達は。」カーラの言葉に一部共感しつつも、町行く活気のある人々を眺めながら、アトルはどこか奇妙な感覚を覚えずにはいられなかった。「同じ国の別の場所では、アルカナがあればどの騒ぎを起こしているっていうのに。」

「フン、世の中とはたいいそういうものだろう。自分達に直接関係がなければ、それはもう別の世界の話なのだ。興味こそ持つても、わざわざ関わるうとはしないものだ。我々のように他人を守る義務があるわけではないからな。」

その頃、馬車はフアドーナにいくつもある円形の広場の一つに通り掛かる。広場の中央には噴水があるので、馬車は迂回して通らなければならない。必然的に馬車は多少大きく揺れる。

「それにしても、隊長、これからどうするんです？アルカナはエンリアルの駐留軍の追跡を何度も振り切っているというし、その上僕達が加わった所で、話は進展するんですかね。」アトルは不安げに言う。

「何を言っている。進展するか、などと弱気なことを言っていては、進むものも進まなくなるぞ。」カーラは咎めるような口調で言う。

「それに、問題はそれだけじゃありませんよ。そうでしょう？」アトルは気遣わしげにカーラを見やる。「なにせ、アルカナのリーダーはあなたの・・・」

「言うな。それくらい分かっている。」カーラの声に多少の苦みが混じる。幼なじみのアトルでなければ気づかなかっただろう程の、ほんの少しの苦み。

「すみません。」アトルは気まずそうに謝る。カーラ自身もきつ

と辛かったのだろうに、わざわざそれを掘り返すべきではなかったと、アトルは悔やんだ。

そう、他でもないアルカナの隊長であるカルダ・ゴートは、カーラの実の兄なのだ。それも、誰もが羨む程の仲のいい、幸せな兄妹だったのだ。

あの時まででは。

その“時”は今や、カーラもアトルも思い出したくないような追憶の彼方に追いやられた記憶の中に、今なお深く根差している“時”だった。

いや、できればこのことは今は思い出したくはない。どうせ、アルカナと対峙するときになれば嫌でも思い出すことになるうが、せめて今は考えないようにしよう。アトルはそう決めた。

「お二方、そろそろ着きますぞ。」ふいに馭者が言った。

見れば、馬車は街を抜けて、草原の中を丘の上にある灰色の壮大な城に向かっていった。エンリアル王城・オロ・レクエルド城だ。その背後には雲一つない晴天の中に太陽が浮かび、まるで後光のように城を照らしていた。その逆光の眩しさに、アトルは思わず目を細めた。

一行がレクエルド城の門をくぐり、広い中庭に入った所で馬車は停まった。馭者が先に馬車を降りて、カーラとアトルが座っていた後部席の扉を開く。後ろを見ると、ゼツタも同じように先導されていた。

馬車から降りると、足が柔らかな地面を踏み締める。地面は一面を奇麗に刈り取られた芝生で覆われている。靴を通って伝わってくる土の柔らかさは、この中庭に世話が行き届いている事を表していた。

目の前には、高い塔が幾つもそびえている。ここに来るまではあまり意識していなかったが、こうして真下から見ると相当な高さだ

と判る。少なくとも、エトワル城の塔よりも高いことは確かだ。

馭者は馬車に乗って門から出ていった。今度は城内から召し使いが現れて、トランプの三人をレクエルド城へと招き入れた。

城内は赤いカーペットが敷き詰められていて、あちらこちらに大きな肖像画や剣などが飾られている。

肖像画にはそれぞれ違った人間が描かれていて、その下に貼られた金色の板に名前らしき物が彫られていた。

「レドノス・ヘルデノン・・・」アトルは何気なくその名前の一つを声に出して読んだ。それは、頭にイバラの冠を戴いた、いかにも勇猛そうな顔立ちの男の絵だった。

「レドノス・・・あのエンリアル史上最大の内戦『カナテラ戦争』の際に貢献したといわれる英雄か・・・」ゼツタが思い出したように呟く。

アトルもゼツタの言葉で思い出す。そう、英雄レドノスと言えば、前にスピルナを訪れていた吟遊詩人の語った唄の一つに出ていた男の名だった。

ユースナ暦865年に勃発した、カナテラという反乱軍とエンリアル王国軍との戦争『カナテラ戦争』。長く続いたその戦争に終止符を打つために立ち上がったのが、レドノス・ヘルデノン率いる『太平軍』だったのだと、その唄には歌われていた。

レドノスは勇敢な戦士であり、有能な策士であったとともに、類い稀な思想家でもあったのだという。

彼は太平軍という一つの軍の長であったにも関わらず、頭にはイバラの冠を被り、戦いでは常に最も危険な最前線で戦ったという。

彼と太平軍はエンリアル、カナテラどちらの側にも着かず、常に犠牲者が最小限になるように努め、最後にはエンリアルとカナテラを和平させるに至った。

彼は、自身の生き様から、君主が臣民に仕え、常に民を思うことの重要さを教えたのだという。

「エンリアル王国は、何よりも英雄や偉業と誇りを重んじる国だ

と聞いたことがあるが、これもその一環という訳か。」とカーラが言った。

その後も壁に掛かる様々な肖像画に囲まれながら、一行は回廊を進んで行った。

しばらくすると、大きな扉が見えてきた。トランプが近づくのを見て、扉を開いた。その扉を通り抜けると、再び回廊が続いていたが、途中で三つの道に別れていた。一行は召し使いの後について左に曲がった。

するとその先にまた扉があった。今度のはさっきのよりも小さかったが、その分より頑丈そうに見えた。

アトルがふと見ると、その扉を護っている近衛兵だけが、他とは違って女性であることに気付いた。立派な鎧甲を着ているので解りづらいが、間違いなく女兵士だ。

理由は至極簡単だ。中で護られている貴人が、女性なのだ。

扉が開くと、アトルは自分の予測が正しかった事をすぐに覚った。夕陽を思わせる真つ赤な緩やかにウェーブした髪の毛、ちょうどカールと同じ年頃の少女が、部屋の奥にある机の椅子に座っていた。

なぜか顔は髪で隠れて見えない。

その上、頭をこっくりこっくり揺れさせている。

扉がトランプ一行の後ろで閉ざされる音を聞いて、少女はびくっとして背筋を伸ばした。

そこでやつと見えた少女の顔は、普段ならばはつきりかわいらしいと言えるのだろうが、その時は“なぜか”多少やつれたように見えた。

「わっ、私寝てない！だつてずっと起きてたもん！」少女は突然言い訳するように訳の分からない言葉を大声で言った。

一瞬して、彼女は目の前にいる人物が誰であるかにやつと気付いた。

はっとして手で口を覆う。

「あつ、もしかして、スピルナの・・・」少女は恥ずかしそうに言いながら、慌ててボサボサになった髪を手でとかしつける。「申し訳ありません！無粋な所をお見せしてしまい・・・」

「あ、いえ、構いませんから、どうぞ落ち着いて。」アトルがフオローするように言った。

「私は、エンリアル王国の王女、デュオ・ファストレスです。」デュオは改めて自己紹介する。しかし、居眠りを見られた今となつては、その威厳は台なしである。

「僕は、スピルナ公国精鋭部隊、トランプの戦闘員・アトル・アルト。」次にアトルが自己紹介する。

「同じく、副隊長のゼツタ・ベルク。」

「同じく、隊長のカーラ・ゴートだ。」続けて二人が自己紹介した。

「それで、あなた達は例の賊の件でいらしたのでしたね。」デュオが念を押す。

「そうです。テルフ同盟からの救援要請を請けて参りました。」

アトルがそれに答える。

それを聞いてデュオはため息をついた。しかしそのため息にどんな意味があるのか、アトル達には分からなかった。

「・・・いいでしょう。ですが、私の方からも一つ要求があります。」デュオはそう言つて鋭い視線を三人に投げかけた。

「なんなりと。」ゼツタは建前上そう答えたが、内心デュオの真意を計りかねていた。一体この王女は何を考えているのだろうか。

デュオは気を落ち着けるように一息ついて、何かを決心したようにゆっくりとした口調で言った。

「・・・あなたがたトランプと、アルカナとの間に、一体どんな確執があるのか、それを教えていただきたいのです。」

その言葉一つで、アトル達は理解した。

彼女が“例の賊”の正体がアルカナであるということを知ってい

るといふことを。

六章に続く

第六章 「秘密」

アルカナ―それは、占いに使うタロットカードの種類を表すのに使う言葉。しかし、トランプと同じように、この言葉にもまた、語源と言うものが存在する。

それは『神秘の力』。目には見えなくとも、カードの並びを裏から操る、いわゆる運命、カードゲームの中の見えざる力である。

そのアルカナという言葉の名前に持つスピルナの精鋭部隊もまた、その名の通り隠された存在なのである。

国を表から治めるトランプとは逆に、裏の世界から国を治める、影の部隊。

トランプのように表舞台に立つことはないが、その分表沙汰に出来ない裏の仕事をこなすことで、スピルナを影から支える存在。

実際、彼等のプロフィールをすべて知っているのは、本人達を除けば、スピルナ公・アルデバランと、トランプのリーダー・カーラのみなのである。

―エンリアル王国 テラール村付近―

「ちつ、コイツら・・・！」ヴァイスが毒づく。

その林の中の獣道で、双方に分かれた七人の戦士が向かい合っていた。一方はエータとパルト、もう一方はアルカナの五人である。

この人数差にも関わらず、勝負には未だ大差はついていなかった。互いに所々傷を負ってはいたが、どれも軽いものだった。それは、エータ達がかなり善戦していることの証だった。

しかし、それにも関わらず、ヴァイス以外のアルカナの面々、特にリーダーのカルダは、まったく焦った様子を見せてはいなかった。そのあまりの冷静さは、逆にエータの方が疑心暗鬼になるほどだった。

「テメーら一体、目的はなんなんだ！」エータが半ば叫ぶように言った。

「けっ、部外者のテメーに教えることなんかねえよ！」負けじとヴァイスが言い返す。

すると突然、それまで戦闘に直接参加していなかったカルダが、ヴァイスの肩に手を置いた。

「待て、ヴァイス、構わんではないか。彼も我が計画の一部なのだ。せめて死ぬ前に、すべてを教えてやろう。」カルダはそう言つてエータの前へと歩み出た。

エータは不意打ちを想定して槍を構え直したが、どうやらカルダには攻撃する意志はないようだった。少なくとも今のところは。

「そうだな・・・何から話せばよいか・・・」カルダはもつたい付けるように語り出す。

そして懷に手を入れると、中からあの透き通った暗い色の球体を取り出した。相変わらず内側から明るくて暗い独特な色の光を発している。まるでその中に小さな宇宙が一つ入っているかのようにだとエータは感じた。

「時にお前、これが一体なんだか分かるか？」カルダはエータにそう尋ねた。

「・・・知るかよ、そんなヘンな球。」エータはカルダの言わんとしている事を計りかねて言う。

「そうか・・・ならば、こっちはどうだ？」そう言つてカルダはその球をしまい、今度はエータに手に持っていた、死に神のそれをおぼせるような何メートルもあるかという巨大な黒い鎌を見せた。

どうやらそれが彼の武器であるようだ。しかし、やはりそれも、銀色の刃が残虐な輝きを放っていることを除けば、特別な点は何も見当たらない。

「いったい、何が言いたいんだ？」エータはカルダを威嚇するように言う。一体、何の目的があつて妙な球や鎌を見せるのだろうか？

「なるほど、そうか・・・」カルダはあからさまに落胆した様子

で言った。「なら、お前は“このこと”について何も知らない、という訳だな。」

カルダは、そう言っただけで笑った。

「いいだろう。どうせ尽き行く命ならば、特別に教えてやろう。かの超古代の伝説の文明、イクイア文明と、三種の神器、そして、一つの玉に秘められた究極の秘密をな！」

―エンリアル王国　オロ・レクエルド城―

「ランプとアルカナの確執？」アトルが平静を装って尋ね返す。「一体どういう意味ですか？」

「とぼけなくとも、こちらには既に分かっているのですよ。」デユオはなおも挑戦的に言う。「それに、教えてくださるつもりなら早くした方がいいでしょうね。テルフ同盟に、あなた達が協力的でないと思われれば、困るのはあなた達の方でしょう？」

「……」アトルはどう答えて良いかに迷い、言葉を詰まらせた。それは、デユオの指摘を黙認することに他ならなかった。仕方なさそうにカーラとゼツタに目配せする。二人も同じような仕方なさそうな視線を返してきた。もうこれ以上の言い訳は無意味だろうと言うことは全員承知だった。

「いいでしょう。」そしてついに観念したカーラが切り出した。「なぜ同じスピルナの精鋭部隊である我々ランプとアルカナが、こうして戦うことになったのか、分かっているかぎりで教えましょう。」

「分かっているかぎりで？」デユオはかすかに眉をひそめ、怪訝そうに聞き返す。「当事者のあなた達に、分からないことがあるのですか？」

「そうですね……なんと申せば良いやら……」カーラは考え込むように言う。「つまり、我々にも、なぜ彼らが戦いの場としてエンリアルを選んだのか、ということは、まだはつきりとは分かっ

ていないのです。」

デュオは、その解答に一応納得したように頷いた。

「それでは、分かっているかぎりで教えてもらいましょう。」

そしてカーラは話し出した。

「面倒な事ですが、そのためには先ず、私の出生の話から聞いてもらわなければなりません。」

ご存知の通り私、カーラ・ゴートは、スピルナ動乱以前にあったスピルナ帝国の最後の皇帝、カースナグの娘であり、皇女でした。そして、今のアルカナ隊長・カルダ・ゴートは、私の実の兄なのです。私達兄妹は、今から十二年前、ここにいる今のトランプ副隊長、ゼッタ・ベルク、当時十八歳だった彼が率いた反乱軍であった『リベラ』によってファンタスマ城が攻め落とされた時に、生き別れとなっていました。私はリベラに捕われ捕虜となりましたが、その時兄はちょうど訓練のために選りすぐりの精鋭部隊と共に城を離れており、無事でした。

スピルナ動乱が始まるのろしとなったその日から兄は、次期皇帝という身分から引きずり下ろされ、妹である私を救出し、ゴート一族を復興するという目的のためだけに生きるようになってしまいました。

一方反乱軍リベラでは、リーダーだったゼッタに対する下剋上が計画されていました。ゼッタが、暴王カースナグの娘である私を、殺さずに生かしておくという命令を下したためでした。彼らは、無駄な殺生を避けようとするゼッタの考えが気に入らなかったのです。部下のその動きを察知したゼッタは、私を連れてリベラから逃げ出しました。そうしてリベラの刺客に追われつつ我々二人が身を寄せたのが、アトル一族でした。」

デュオが黙って聞いている中、カーラはそこで一息ついて、ふとアトルの方を振り返った。アトルはカーラと同じくどこか辛そうな顔をしていたが、黙って頷いた。そしてカーラは続けた。

「そんな中、スピルナでは皇帝という楔を失い、各地で起こりは

じめた紛争が肥大化し、巨大な内乱となっていました。それがスピルナ動乱です。そこで十年もの間様々なことがあつて後、アルト家がついにそれを終結させるのですが、その内容は今お話することではありませんね。

そうしてアルト家を中心として、二度と同じような悲惨な内戦を起こさないために、新しく平和平等をモットーとして新たな政治体制を作り上げることとなりました。それが、トランプ・アルカナ・アルデバランによる分権制度でした。

その内、トランプが国の象徴的存在、いわゆる表の部隊であるのに対し、アルカナは影でスピルナを支える裏の部隊でした。

そして、国民の投票で選出されるトランプとは違い、アルカナはアルデバラン公に指名された隊長と、その隊長によって指名された隊員で構成されているのです。そして、アルデバラン公が指名したアルカナの隊長こそが、カルダ・ゴートでした。」

「・・・なぜ、スピルナ公は前の皇子などを隊長に任命したのですか？」そこでデュオが口を挟む。「そんなことをすれば、いろいろと問題が起こりそうですが？」

「兄の第一の目的は、ゴート一族の復興でした。けれど、戦争に敗北した当時のゴート一族に、一族を自力で建て直す余力はありませんでした。そのため、アルト一族に頼る以外に、復興する手だてがなかったのです。そして、アルデバラン公にとっても、兄の天才的な能力がアルカナに必要でした。そこで、アルデバラン公と兄は互いの利益のために手を組んだのです。ですが、結局兄はその誓約を破り、再びゴート一族の名のもとにスピルナを支配しようと、こうして反乱を起こそうとしているのです。これが、私達の知っている全てです。」

カーラはそう、言い終えた。

「なるほど。ということとは、彼らは今はエンリアルで事件を起こしていても、最終的な目標はスピルナであるか？」デュオは立ち上がり、部屋の中を歩きながら尋ねた。

「その通りです。」カーラは答えた。

「では、あなた方は自国の問題をこの国に持ち込んで、これほどの被害を及ぼさせていると、そういう事ですか？」デュオは続けて尋ねる。

「はい、その通りです」カーラは覚悟を決めて、同じ返事をした。デュオは大きくため息をつき、しばらく考え込むようにしていた。しかし、やがて言った。

「良いでしょう。だいたいの事情は分かりました。どちらにしろ、その件は今横に置きましよう。それよりも、今はアルカナへの対処です。」デュオは早口で言った。なぜだか、だんだん焦っているように、アトルには思えた。

その時、部屋の小窓を通して、何かが入って来た。しかしそれは、ランプの三人にはにわかに信じられない物だった。

それは妖精だった。見の丈十五センチほどで、トンボのような羽が背中についている。その妖精は、ピンク色の髪を肩に当たる程度の長さに切った、女の子だった。

「ごめんなさい、びっくりさせてしまいましたね。」デュオはそう言って謝ると、飛んできた妖精に手をさしのべた。妖精は見馴れない三人に興味を示しつつ、デュオの手の平に着地した。「この子は、特殊な魔法を使って私自身の一部から生み出した、守護精^{バトロン}霊なのです。分かりやすく言えば、私の分身、といった所でしょうか。」

そういえば、エンリアルにはそう言った魔法の秘術があると聞いたことがある、とアトルは思った。しかし、何しろスピルナ公国は他のどの国よりも魔法になじみがうすい、魔力の弱い地域であるから、こういった物には不慣れなのだ。

デュオはその妖精としばらく話し合っていたが、話が終わるとこちらに振り向いた。

「今、情報が入りました。」デュオは静かに言った。「例の賊は今、テラール村付近でエータと戦闘しています。」

「エータ、というとこの国の王子のエータ・レアロス殿のことか

？」ゼツタが驚いて聞き返した。

「ええ、その通りです。」デュオが答えた。

「では、彼がたった今アルカナの五人と戦っている？」「カーラが信じられないように聞いた。

「そうです。私のもう一人の守護精霊であるハルバートハトロンに後を追わせていたので、間違いありません。」デュオが再び答える。

「それなら、急いで救援に行かないと・・・」アトルが焦った声で言った。「それで、そのテラール村というのはどこにあるんですか？」

「ここから東に五百キロ行った所です。」デュオのその言葉にアトルは絶句した。そして今更ながらに、デュオの声が微かに震えていることに気がついた。

自分のフィアンセが危機にさらされているのだ、無理も無い。けれど他国からの客の手前、感情を表に出せないだけなのだ。とアトルは思った。そしてこういう時何よりも辛いのは、それに対して自分が何もできないということなのだ。

「五百キロか・・・とてもじゃないが歩いて間に合う距離じゃ無いな。」ゼツタが言った。

「でも、何とかして助けにいかないと・・・。」アトルは焦った声で言う。

「だが、どうやって行くつもりだ？」カーラが聞いた。「そんな焦り方をするなんて、アトルらしくないぞ。」

「そうですよ。何も思い悩むことはない、と言ったでしょう？」

その声は、突然窓の外から聞こえてきた。あまりにいきなりのこと
で、トランプの三人とデュオは驚いて窓の外を見た。

そこに立っていたのは、ザドウィル王国の巫女・クリヤ・オケア
ノスだった。

―エンリアル王国 テラール村付近―

「イクイア文明のことは、当然知っているな？」カルダがエータに尋ねた。

「知ってるぜ。あの、五千年くらい昔に滅びた巨大文明のことだ。でも、それがなんだってんだ？」エータが聞き返す。

「では、どうしてイクイア文明があれほどに栄え、それなのにたったの一夜にして滅びた理由は、知っているか？」カルダが続けて尋ねた。

「何が言いたい？」エータはカルダをにらみつけつつ言った。

「エータ、気をつけて。何かの罠かも。」隣でパルトが囁く。それにエータは頷いた。

「知らないか。まあ、当然だな。では、その伝説のイクイア文明の“黄金時代”を繁栄させ、そして滅ぼした張本人を、今オレが持っている、と言ったらどうする？」

カルダのその言葉にエータは絶句した。イクイア文明は、現在存在するどの国よりも栄えていたと云われる、それこそ伝説の中の伝説だった。それを一夜にして滅亡させた張本人がもし存在するとすれば、とんでもないことだ。

「・・・そもそも、そんなものが存在するのかよ。」エータは探りを入れるために聞き返した。

「ああ、存在する。それも今、お前の目の前にな。」カルダはそう言つて、手に持っていたあの不思議な光を放つ球を見せた。「この球こそが、それなのだよ。」

この玉は、真玉という、魔法の球だ。この中には、凄まじい魔力が秘められている。イクイア文明は、この玉が持っている魔力を使うことで、あそこまで繁栄することができたのだ。

だが、今のこの真玉はまだ完全ではない。イクイア文明の最後の国王、エリユアルス王が、ある方法でこの玉の力を封印したからな。それは、イクイア文明で生き残った三人の人間、エアセイラ、カースローダ、アルクトウルスの血だったのだ。彼等自身、あるいはそ

の子孫の血がなければ、この玉の真の力が解放されることはない。」

それを聞いて、エータはあることに納得した。アルカナがわざわざエンリアルに来て、村を襲っていたのは、エアセイラ・レアロスの子孫である、自分の血を求めた故だったのだ。カルダはエータの血を使って、あの魔法の球とやらを解放させようとしているのだ。

「そうと分かれば、余計オレが負ける訳にはいかねえな。」エータは言った。「さつさとケリをつけようぜ、パルト。」

その合図を聞いて、パルトは嫌そうな顔をしたが、やがて言った。「分かったよ、やれば良いんでしょ、やれば。」

そう言っただけでパルトは首から提げた、彼自身の髪の色と全く同じオレンジ色のネックレスを掴んだ。すると、突然パルトの体が光に包まれた。

「・・・何をする気だ!？」ヴァイスはそれを見て言った。

「お前らも気付いてると思うが、パルトの本当の姿はドラゴンなんだよ。」エータはそれに答えて言った。

そう言っている間にもパルトを包むオレンジの光はどんどん大きくなっていく。それが直径5メートルほどになったとき、その光は急速に弱まって行った。

そして光の中から出てきたのは、オレンジ色のドラゴンだった。長い首に二本の角が生えた頭、四本の脚には銀色に輝く鉤爪が生えている。

そのドラゴン、パルトは閉じていた翼を大きく広げ、アルカナの五人を威嚇するように吠えた。その咆哮は周りの木々をも揺らすような強さだった。

「この姿になると疲れちゃうから、早く終わらせるよ。」パルトが言った。

「ああ。」エータはそう答えると身軽にジャンプしてパルトの背に乗った。

「来るがいい、エアセイラの子孫よ。」ドラゴンとなったパルトにも動じる様子を見せず、カルダが不敵な笑みを浮かべて言った。

―オロ・レクエルド城―

「クリヤさん・・・どうして、あなたがここに・・・」アトルは驚きを隠せない様子で言った。

「いきなり言っても信じないかもしれませんが、『預言者』はその気になれば、どこにでも一瞬で移動できるんですよ、アトルさん」
「クリヤはあくまでにこやかに、突拍子も無いことを言った。『そしてその力を、他の人に使うこともできるんです。』」

「それはつまり・・・」カーラがまさかというように言った。「私達を目的地に瞬間移動させることができる、と言うことですか？」
「どれだけ離れていても、一瞬で。」クリヤは事もなげに言った。
「・・・あなたは確か、ザドウィル王国の巫女どのでは？」そこにデュオが割って入ってきた。「どうしてこんな所に？」

「クリヤ・オケアノスと申します。突然入ってきて申し訳ありません。」「クリヤがデュオの方を向いて名乗った。」「ですが、今は緊急事態のようですので。」

「まあ、それはそうですが・・・」デュオはそう言っただけ息をついた。

「まったく、どうしていつも私の周りこんな・・・」というようなデュオのつぶやきを、アトルは聞いた気がした。

デュオはそして、言った。「いいでしょう、それでクリヤ殿のその瞬間移動というのは、安全なんでしょうね？」

「私の命にかけても。」「クリヤはそう言ったが、少しして付け足すように言った。」「ですが、この力で『跳』ばせられるのは、三人までなので、ここに居る全員を跳ばすという訳には・・・」

「それでは、トランプの三人に行ってもらいましょう。」「デュオは驚くほどテキパキと言った。アトル達が気掛かりそうに見ると、デュオはすかさず言った。」「何しろ、間に合わなければ意味がありませんから。迷っている時間はありません。」「

「わかりました。」クリヤはデュオの心情を汲み取ったように言った。「それでは、三人とも、こっちに来て下さい。始めます。」トランプの三人がクリヤの前に来ると、クリヤは呪文を唱えはじめた。それは、アトル達が誰一人知らない、神秘に満ちた言語だった。クリヤが歌うように呪文を続けると、どこからか光が沸くように出てきて、三人を包んだ。

「トランプ、どうか、エータを……」アトルはデュオのその先を聞き取ることは出来なかった。魔法の力が、アトル達の居る空間と外界をシャットアウトしたのだ。魔法のことは、アトルは何も知らないが、おそらくは周りに影響を及ぼさないためなのだろう。

三人を包む蒼い光は、だんだんとその強さを増して行った。

そして、今にも瞬間移動が始まるかというとき、突然クリヤの声がこだました。

「言い忘れてましたが、この瞬間移動には数分間の大きな揺れが伴いますので、船酔いする人なんかは気をつけて……」

アトルが反論する間もなく、瞬間移動は始まった。そしてそれは、アトルにとって人生最悪の経験だった。

「行きましたか。」デュオはクリヤと守護妖精バトロンのヴァルフアーラと三人きりになった部屋で物憂げに言った。「本当に、うまく行ってくれると良いんですがね。」

「それとデュオさん、」クリヤがふと思い出して言った。

「私、今力を使い果たしたせいで、ザドウィル王国に帰れないのですが、帰りの船を手配してくださいませんか？」

「……こんな時くらい、ゆっくりさせてちょうだい。ホント、どうしていつも私の周りにはこんな忙しいのかしら……」デュオは窓脇に置いてある水槽の中のグッピー達を眺めつつ、つぶやいた。

七章に続く

第七章 「戦闘開始」

イクイア文明は実の所、大昔の文明であるが故に、正確なことはほとんど分かつてはいない。事実、今知られているイクイア文明に関する情報は、そのほとんどが後になって考えられた伝説であり、実はそんな文明は存在しなかったのではないかと主張する者も少なくないという程だ。

そんなイクイア文明に纏わる話の中にも、定説といわれるものがある。それは、『生き残った三人』と、その三人が持ち逃げしたという『三種の神器』の話だ。それは、イクイア文明で奉られていた、三つの神器を、滅亡の際に三人の人間が持ち出した、という話だ。そんなイクイア文明の生き残りと言われるアルクトウルス、カースナグ、エアセイラの子孫が誰なのか、それを知っている者もまた、ごく限られた者達だけなのだ。

―テラール村付近―

「さあ、降参するなら今だぜ。」エータは厳肅な声で言った。その手に握られた槍・聖槍“エイレア”の切っ先には、カルダの顔があった。

ドラゴンの姿になったパルトに騎乗したエータの力は、凄まじいものだった。ものの数分で、スピルナ公国の精鋭と呼ばれるアルカナの隊長、カルダを圧倒していた。

「フン、なるほど。」カルダはそれでも落ち着いた声で言った。

「やはり、『龍騎士エータ』という通り名は伊達では無いようだな。」

「そうやって余裕ぶっこいてられるのも今のうちだぜ。」エータはそう言って再びエイレアをカルダに向けて突き出した。カルダは手に持っていた大鎌でそれを素早く弾くと、後退りして距離を取る。そこに追い討ちをかけるようにパルトの尻尾が上からたたき付け

られる。その威力に辺りに砂埃が立つ。

「ボス・・・！」それを見ていたアルカナの一人、ナラカが心配そうな声を上げる。

「・・・お前ら、手出しはするな。」すると砂埃の中からカルダの声がした。見てみると、カルダは大鎌を盾にしてパルトの一撃を耐え抜いていた。「コイツの相手はオレ一人で充分だ。」

そう言っただけカルダはオレンジ色のパルトの尻尾を押しつけた。あれほどの威力の攻撃を受けたというのに、カルダの大鎌には傷一つ付いていなかった。

「エータ、あの鎌なんだかおかしいよ。」パルトがエータに囁いた。「あの頑丈さ、もしかしたらエータの持つてるエイレアと同じ・・・」

しかしパルトはその先を言うことが出来なかった。今の一瞬の内に、カルダの鎌の刃がパルトの首の下に迫っていた。急いで首を曲げて避けたから良かったものの、もし今のを避け損ねたら、いくらドラゴンといえど首が飛んでいたに違いなかった。

「パルト、上昇だ！」というエータの声に従って、パルトは大きな翼を羽ばたかせて上空に飛び上がった。相手が空を飛べない以上、龍騎士としては空から攻撃するのが最も効率的だ。

「もう、これだからばくは戦いたくなかったのに・・・」パルトはため息混じりに言った。一言にため息といっても、ドラゴンの物となるとそれだけでも迫力がある。

「るせーな、とにかく今は目の前の敵だろうが。」エータは半ばばやくように言った。

「わかったよ、でも高級ロースハムおごる約束は忘れないでよあ。」パルトはそう言っただけ、しかしその口調とは裏腹に、その精神はもう戦いに集中して、研ぎ澄まされていた。普段はマイペースだけど、やればできる子、それがパルトだ。

「なるほどな。」上空で旋回しているパルトの腹を見つめながら、カルダは言った。「上空からの急降下を利用して攻撃しようと言う

訳か。ちょうど良い。」

カルダはそう言つて手に持った真玉を掲げて、やや不気味な声で言った。「それならば、こちらもこの真玉の力の一部を見せてやる。」

その言葉に呼応するように、真玉から光が湧き出て、カルダの体を包み込んだ。

「さあ、かかつてこい、エータ・レアロス。」エータは下の方でカルダが言っているのを聞いた。

「言われなくても行かせてもらうぜ！」エータがそう言ったのを合図に、パルトは一気に羽ばたいていた翼を閉じて、急降下の態勢に入った。その落下のスピードは一気に上昇し、周りで風がビュウビュウとなり、エータにも強風が吹き付けてきた。しかしエータはその風に負けじと槍を構えた。

そして、地上で大鎌を構えるカルダと、上空から急降下するパルトとの距離はぐんぐんと縮まっていき、そしてついに、その二つがぶつかり合った。

ぶつかる瞬間、カルダは軽やかな動きで見を翻してエイレア及びパルトの直撃をかわし、その横から大鎌の一撃をエータに向けて放った。そしてすかさずバックステップで距離を取る。

これらすべてがパルトの落下の一瞬の事だった。そのスピードは異常だった。

「ぐ……何だよ、あのスピード……」エータは呻くように言った。その左腕には、大鎌によって受けた真つ赤な血に染まった切り傷があった。痛々しいその傷は大鎌の黒い刃によってまっすぐに切られていた。

しかし、カルダの考えとは裏腹に、首は無事に繋がっていた。カルダは間違いなくエータの首を狙っていたはずだったのだが。

どうやら攻撃の際、鎌の刃がパルトの固い鱗にぶつかって、軌道がズレたようだった。だが、目的は果たした。

「どうだ、見たか。これが真玉の力だ。」カルダはいかにも余裕といった表情で言った。「真玉は、それを持つものに無限の力を与える。いくら龍騎士といえど、無限の前では無に均しい。」

しかし、エータは納得が行かなかった。「なんでだ・・・真玉はアルクトウルス、カースローダ、エアセイラの血で封印されているんじゃない。」

「それは残念だったな。まだ解らないのか？」カルダは言った。

「このオレ、カルダ・ゴートこそが、その内の一人、カースローダ・ゴートの子孫なのだ。オレの血によって、真玉はすでに一段階解放されているのだ。そして・・・」

そう言つてカルダは、大鎌の刃に付いたエータの血糊を、一滴真玉の上に垂らした。その瞬間、真玉はその光を一層強めた。

「これで二段階。」とカルダは続けた。「残るはアルクトウルスの血だけだ。さて、必要だったもう血は貰ったことだし、お前には消えてもらおう。」

真玉によって力を大幅に増したカルダの速力に、すでに手負いのエータはついて行くことが出来なかった。目の前に大鎌を構えたカルダが迫るころ、さしものエータも死を覚悟せずにはいられなかった。

しかし、その大鎌の刃がエータの首を刈り取ることはなかった。

見ると、カルダとエータの間には一人の人間の姿があった。その両手に持つ二振りの短刀で、カルダの鎌を受け止めていた。

「誰だ・・・てめえ。」エータは荒い息と共に言った。

「助けた者に向かって『誰だ』とはご挨拶だな、エータ・レアロス。」ゼツタは腕に満身の力を込めつつ言った。カルダの筋力は真玉の力によって上昇している。その攻撃を受け止めただけでも十分凄い。「俺の名はゼツタ・ベルク。スピルナ公国の精鋭部隊、トラップの副隊長だ。同盟間の盟約に則って、助太刀する。」

「まったく、随分とお堅いのが来ちまったもんだぜ。」エータは状

況に似合わぬ声で言った。

「助けてもらったんだから、文句言わないの。」それに対してパルトがまるで母親のような口調で言う。

その時、カルダの後方から別の二本の刃が迫った。カルダはそれを横に避け、剣は空を斬った。それはアトルとカーラの剣だった。

「来たか、アルデバランの犬ども。」それを見ていたアルカナの一人、エストが呟くように言った。

「これで役者は揃ったな。」エストの隣でアルカナ副隊長、バードも言った。

こうしてテラール村付近の獣道に、トランプのカーラ・アトル・ゼツタ、エンリアル王国のエータ・パルト、そして反対側にはアルカナのカルダ・バード・エスト・ヴァイス・ナラカが揃った。

「まったく、瞬間移動の時の揺れのせいで、本当にまた船酔いになる所でしたよ。」素早く体を反転させてアルカナの方に向き直りながら、アトルが言った。

「兄さん……」その隣でカーラは誰にも聞こえぬように、囁くような声で言った。

「へっ、ついに来たな、トランプどもめ！」ヴァイスは戦うのが待ちきれない様子で言った。

「この戦いで、すべてが終わる……」とアルカナの一人、ナラカが言った。

「いいや、違うな、ナラカ。」その言葉をカルダが訂正する。「すべてはこれから、始まるのだ。」

「時にエータ殿。」カーラがエータの腕に走る赤い切り傷を見て言った。「その傷は大丈夫か？」

「女に心配されるほどじゃねえよ。」とぶっきらぼうに言うエータは、明らかに強がっていた。

「もうダメだって言ってます。」とエータのセリフを勝手に通訳するパルト。「君みたいなカワイイ女の子にナデナデしてもらわないと死んじゃうって。」

「誰がだ！勝手に変に訳すな！」エータがつっこむ。

「ていうか冗談言ってる場合じゃないですよ！」そこにアトルが喝をいれる。

「それで、実際はどうなのだ？」くたびれたようにゼツタが尋ねる。

「大丈夫だ。血は出てるが、あまり深くやられたわけじゃねえ。」そう言つてエータは用意していた大きな布を取り出し、それで手際よく傷口を縛った。「しばらくはこれで何とかなる。」

「そうか。」とゼツタは言った。「それでは戦力にもなる、と考えて良いか？」

「問題ねえ。」エイレアを握り直して、立ち上がりつつエータは言った。

「・・・来ますよ。」そこにアトルが緊張した声で言った。トランプとエータ、パルトはその言葉に迅速に反応した。

次の瞬間、いくつもの鉄と鉄がぶつかり合うけたたましい音が鳴り、おそらく最後になるであろう戦闘が始まった。

しかし、戦闘はトランプ側の有利には進まなかった。何より、もと一つのチームであるアルカナに対し、信頼関係のないトランプとエータ・パルトのチームでは、やはりチームワークに歴然とした差があった。

仲間の戦法を知り尽くしているアルカナは、まさに適材適所、一人が隙を突かれればすかさず仲間が助けに入る、と言った感じで、どちらが優勢かは明らかだった。

（このままじゃ埒が明かない・・・！）そうアトルが覚ったのは、戦闘が始まってすぐの事だった。

その時、エストの振るった剣を受けて後ずさったアトルの背中に、別の背中が当たった。エストの剣をはじきながら隙を作らないように一瞬だけ振り返ると、それはエータだった。両手に刃渡り二十五センチはあるかという鉤爪を装備したヴァイスと対峙している。リ

イチでは槍の方が圧倒的だが、片腕が使えないエータは素早いヴァイスの攻撃を受けるので手一杯のようだった。

「トランプの一人か？」エータは背中越しに声をかけて確認してきた。

「敵だったらすぐに刺してますよ。」とアトル。

「それもそうだな。それより、お前も気づいてるだろ？」エータが何について聞いているかは明らかだった。

「もちろん・・・チーム戦じゃあ分が悪い・・・多分、ばらばらに分かれて戦った方が良いでしょうね。」アトルが言い終わるとほぼ同時にエストの剣が眼前に迫る。頭を下げて避ければ後ろのエータに攻撃が当たってしまう。しかし間に剣を入れて防ぐだけの間隔はない。アトルは思い切ってその剣を素手で掴んだ。

しかし、銀色に輝く刃がアトルの手を引き裂くことはなかった。アトルの手は青色の光に包まれていた。エネルギーを変換して操る能力、バチを使って手を刃から守ったのだ。体に負担はかかるが、首を切り落とされるよりはマシだ。

「その通りだ。とにかく、こっちでなんとか隙を作る。そこで一人ずつ敵を引き付けて個人戦に持ち込む。お前の仲間にもそう伝える。」エータもまたヴァイスの振るう鉤爪を弾きながら言った。

「分かりました。」アトルは仕方なさそうに言った。この乱戦の中でカーラとゼツタに情報を伝えるのは簡単ではないが、このまま負けるよりはまだいい。

アトルはエストに向かって大振りに剣を振るった。エストは突然の反撃に驚いたように後ずさる。アトルは続けて突きを繰り出してエストを追い払った。

そしてカーラに作戦を伝えるためにその場を素早く逃げ出す。ふと後ろを見ると、エータもまた仲間のドラゴンに作戦を伝えるために隙をついてその場を退避していた。

目の前にゼツタの姿が見えた時、後ろからエストの剣が横なぎに迫るのが直感で解り、アトルは素早く見を屈めた。白刃が頭の上で

風を切る音が聞こえた。

そして次の瞬間に身を屈めたアトルの上を、走ってきたゼツタが軽々と飛び越え、アトルの後ろにいるエストに向かってナイフで切り付けた。

アトルは迷わず目の前にダッシュして、それまでゼツタと戦っていたカルダに向かって剣を振るった。こうしてゼツタとアトルは互いの相手を交換する形となった。普段から共に鍛練していたからこそチームワークだった。

アトルはカルダの振る真つ黒な大鎌を剣で受け止める。そのあまりの威力にアトルは驚愕した。このままでは押し負けてしまうと感じ、すぐさま右腕と剣にバチを送り込み、強化する。

かなりの力を消費して、やっとカルダの大鎌が止まった。アトルの体を疲労が包んだ。

直接ぶつかり合つては勝ち目がない。アトルはそう思つてカルダの攻撃範囲の外に後ずさりする。後ろにゼツタの背中を感じた。

「何か用か、アトル？」ゼツタが背中越しに尋ねる。わざわざ敵に背を向けて走ってきたのだ。それなりの理由があつたと考えるのは当然だろう。

「エンリアル王子からの、伝言です。」そう言つてアトルはゼツタに、エータの言つたことをそのまま伝えた。

「そうか。分かつた。隊長にはオレから伝える。」ゼツタは早口にそう言つた。「少しの間、お前に二人を任せることになるが、大丈夫か？」

「・・・大丈夫です。」アトルは息を荒げていたが、それなりの確信を持つて言つた。「頭を下げてください！」

アトルはそう言つて思い切り剣を円を描くように振つた。その攻撃範囲にはエストとカルダの両方が入っていた。アルカナの二人は攻撃をかわすために後ずさり、そこに一瞬の隙が生まれた。その隙についてゼツタはカーラを見つけるためにその場を去つた。

アトルは二人の敵に挟み撃ちされないようにすぐさま横に移動し、

向き直ってエスト、カルダの二人と対峙した。

その頃エータは、ドラゴンの姿のパルトに騎乗して、ナラカとヴァイスの二人と戦っていた。パルトに乗っているお陰でエータの視点は高くなり、戦闘の様子を広い視界で確認することができた。

「・・・ねえ、エータあ、まだなの？」パルトがつまらなそうに愚痴をこぼす。その時、ヴァイスが自分の懷に潜り込もうと距離を詰めてきたのを見て、パルトは顎を開いて火炎弾を吐いてヴァイスを牽制した。

「待て、もう少しだ。」エータは戦況を注視しつつ短く答える。今、作戦はランプの三人の内二人に伝わっているようだ。そして一番背の高い一人が、最後の一人の女に伝えに行っているところである。それが伝われば、準備完了だ。

「・・・よし、行くぞ。」しばらくしてエータがそう合図し、パルトの背から飛び降りた。

それを聞いたパルトは、すかさずその巨大な翼を広げ、周りに烈風を巻き起こし、エータを地上に残して飛翔した。ランプの三人はその意味を理解して、身構えた。

パルトは大きく息を吸い込み、胸を膨らませた。パルトの体が熱でオレンジ色に輝いた。次の瞬間、パルトは体内で生み出した超高温の炎を一度に吐き出した。戦場をオレンジの火炎が包み込む。

実の所、この炎には見た目ほどの破壊力はなく、そのほとんどが目くらましでしかなかった。しかし、それでも今回の目的は充分果たすことはできた。

アルカナの五人がその火炎弾に気を取られた一瞬の間に、ランプの三人とエータは行動を起こしていた。

数秒の後、パルトの吐いた炎がすべて消えた時、パルトの他にそこに残っていたのはナラカ一人だった。

「ありゃ、それじゃばくの相手はキミってことになるの？」パルトは人間の姿に戻り、すたっと地上に着地して言った。「女の子に

手を上げるのは嫌いなんだけどなあ。」

「・・・そうして余裕でいられるのも今のうちよ。異形の者よ。」
ナラカは氷のように冷たい声で言った。

八章に続く

第八章 「毒と棍」

リベラは、スピルナ帝国がカースナグによる圧政のために苦しんでいた事から、必然的に生まれた反乱軍である。

その明晰な頭脳によってリベラを勝利に導いたゼツタ・ベルクをリーダーとして、その士気の高さを武器に次々と帝国軍を打ち破って行き、それに触発されて各地で生まれた反乱軍も巻き込み、最後にはついにカースナグの城、ファンタスマ城を陥落させるに至った。しかしそれを期にリベラは、崩壊の道を歩みはじめた。リーダーであったゼツタは捕虜だった皇女・カーラを連れてリベラを脱走し、リベラはそれからの方針をめぐって分裂がおき、そしてやがて幕を開けたスピルナ動乱のあおりを受けて、ついにリベラは完全に崩壊したのだった。

その後、リベラのメンバーがどうなったのか、知るものは少ない。

――テラール村付近の林――

「理解できないなあ。」ナラカの攻撃を楽々と避けながらパルトはそうぼやいた。

ナラカは両手の袖に忍ばせていた刃の薄いナイフをパルトに向かって突き付ける。パルトはそれをバックステップでかわした。

「キミみたいな若い女の子が、何でそんな刃物なんか持って戦ってるの？」パルトはいつも通りの眠たげな目でそのナイフを眺めた。そのナイフは剃刀のように鋭く研がれていて、軽く触れただけでも簡単に皮膚を切れそうだった。

しかし、それは戦う武器にしては薄すぎるように見えた。あれではいくら切れ味がいいといっても切れるのは体の表面だけで、敵を倒せるだけの破壊力をだそうとすれば、ナイフの方が先に刃こぼれするか刃が曲がるかしてダメになってしまうに違いない。パルトにはそれが不思議だった。

「それに、そんな薄いナイフじゃばくは倒せないよ。」パルトは、感じた通りのことを口にした。

「・・・うるさい・・・！」ナラカは冷たい声でそう言つて、ナイフでパルトに切り付けた。その迫力に気圧されたのか、パルトは一瞬回避を怠つてしまい、ナラカのナイフがパルトの頬に細長い切り傷を残した。しかしパルトの予想通り傷は浅く、敵にダメージを与えられるような攻撃とはお世辞にも言えなかった。

「私が戦うのは・・・あのアルデバラン・アルトへの恨みを晴らすためよ。」ナラカは、あからさまな憎しみをこめて言つた。

「復讐？一体なんでそんな事を？」パルトは微かに目を細めて尋ねた。そんなパルトの目の前に再びナイフが迫り、パルトは素早い動きでそれを回避した。

「・・・私は、スピルナ帝国のノーレラス地方の小さな村で育つた。スピルナ動乱の只中、ある一つの軍隊が私の村を訪れた。」ナラカは静かに語りだした。

「その軍は、私達に兵糧を要求した。その頃自分達の生活で手一杯だった私達は、それを拒んだ・・・」

そして、私の村は気分を損ねたその軍によつて焼き払われた・・・ただの気晴らしのために。生き残つたのは、私と姉だけだった。」

「アルデバランって、確かその戦争を終結させた英雄でしょ？その話とどう関係があるの？」

「・・・私が怨んだのはそのことではない。時代が時代、人が死ぬのは仕方の無いことだった。辛かったが、そのこと自体には見切りをつけられた。」ナラカは低いトーンのまま喋つた。

「私と姉は生き残るために盗賊となった。けれどしばらくしてその姉も、盗みに入つた家の主に見つかつて・・・」

その悲しみに精神が崩壊しかけていた私を救つてくれたのが、カルダだった。彼は、自分が戦争に勝てば、必ず私の村を焼いた軍隊と、姉を殺した男とを正義という法の下に公平に裁くと約束した。それは私が何よりも求めていた事だった。そして私は彼の武器にな

った。

しかし、戦争に勝利したのはアルト一族だった！そしてアルデバランはこう言った。『戦争は終わった、もう憎み合うことは止めて、互いを許しあつて平和を謳歌しよう』と！それが、平和主義をうたったアルデバランの考えだった。

『悪を赦して、憎しみを持たず、それによつて平和を手に入れる』
・・・たしかにそれは、美しい事かもしれない。確かにそれは何にも勝る善行かもしれない！

けれど、それでは、私の憎しみはどこに持つて行けばいい！？両親を、知り合いを、友達を、姉を殺された私の憎悪は、どうやつて晴らせばいい！？

そして私は誓った。必ずアルデバランを打倒し、戦争で人を殺した者達に、正義の裁きを下すと！貴方のような部外者に、邪魔される筋合はない！」ナラカの声は、次第に感情的になっていき、仕舞いには半ば叫ぶようになっていた。そして続けざまにナイフを振るった。

「なるほどね。でも、やっぱり・・・」パルトはそう言いかけて突然妙な感覚に襲われた。体から急激に力が抜けて、パルトは膝をついた。急にめまいがして、平衡を保つのが難しくなつて体がぐらつく。

ハッと気づいてパルトは頬の傷を押さえ、手についた血を舐めた。血に特有の鉄の味とは別に、不自然な苦みが混じっていた。

「まさか・・・刃に毒を・・・」パルトは歯噛みして言った。だから、あのナイフはあれほど鋭かったのだ。敵を斬つてダメージを与えるのではなく、小さくても傷を作つて毒を入り込ませるのが目的だったのだ。

「ようやく効いてきたようね。貴方は人間じゃないから、毒が回るのに時間が掛かったようね。」ナラカは、もとの冷静さを取り戻していた。「その毒は、私の使う中でも特に毒性が強いから、いくらドラゴンであつてもちゃんと効くようね。」

「……くそ……」パルトは毒づいた。自分の体が発する警告から、ナラカの言葉がはったりで無いことは分かっていた。

パルトは震える手で自分の首かざりを掴んだ。再びオレンジ色の宝石が発光する。

「だから……エータに言ったんだ、ぼくは、戦いたくないって……」パルトは苦しそうに呻いた。そう言う間もオレンジの光がパルトを包み込む。「ぼくの、本気は、自分でも、抑え切れなくなるから……!」

そして、光がパルトを完全に取り込んだ。次の瞬間、光が弾けて、ドラゴン化したパルトが現れた。全身を包む鱗が、さっきよりも強く輝いている。

「この状態なら、しばらくは毒を抑えていられそう……」パルトはその言葉通り、さっきまでよりも大分落ち着いた声で言った。

「貴方は、あくまで私の邪魔をするというの?」ナラカは怒りをにじませた声で言った。「私の言ってる事が間違ってるって言うの!?!」

「やめなよ、復讐なんて、くだらない。」パルトが言った。「どんな理由があろうが、誰のせいだろうが、『護れなかった』のは、キミじゃないか。」

「うるさい!」ナラカはそう叫んで、パルトに向かってナイフを投げ付けた。しかし、パルトの頑丈な鱗には、傷一つ付かなかった。「貴方に何が分かる!大切な人達を殺されるのが、どんな気持ちなのか!何も知らないくせに、知ったような口を利くな!」

ナラカはもう一方のナイフも投げ付けた。やはり、再びパルトの鱗に弾かれる。そして、ナラカは武器を失った。

「……知ってるよ。」パルトはしばらくして静かに言った。「自分の大事な人が殺される気持ちは、痛い程よく分かるよ。世界の中でキミだけが、その痛みを経験してる訳じゃない。誰だって生きていれば、そういう困難に出会うことは必ずある。大事なのは、それにどう対処するかなんだ。」

パルトはそう言いながら一歩ずつナラカに歩み寄った。丸腰のナラカは、ただ後ずさることしかできなかった。

「憎しみに負けちゃダメだ！復讐なんて、したって何の意味もない！死んで帰らぬ者を想うんじゃない、今ある命を護るんだ！」パルトは一言一言噛み締めるように言った。「ぼくは……」

そこで突然、パルトは言葉を切った。毒が予想を超えて進行したのだ。力尽きて、ナラカの目の前で倒れる。オレンジ色の鱗がバラバラと光となって霧散し、人間の姿のパルトが残る。

その姿を見て、ナラカの脳裏に一人の少女の顔が浮かんた。何年も前の記憶、忘れられない、好きだった姉の記憶だった。追憶の中の姉は、ちょうどこの、目の前に倒れている少年と、同じことを言っていた。

憎しみに捕われてはいけない、もうないものを欲しがらんじやなく、今あるものを大切にするんだ、と。

半ば葛藤するように、半ば思い出に浸るようにナラカは長いこと感慨に耽っていた。

しばらくして、ナラカは懷から小さな瓶を取り出した。そしてそれを倒れているパルトの目の前に置いた。

「解毒剤よ。」ナラカは静かに言った。「ありがとう。でも、それでも、やっぱり私は復讐を諦める訳にはいかない。復讐こそが、身寄りのない私にとって、唯一生きる目的だから。せめてもう、邪魔はしないで。」

そう言ってナラカが立ち去ろうとすると、後ろで乾いた音がした。振り返ると、パルトが身を起こしていた。

「聞き忘れてた……」パルトは、かなり辛そうな様子でありながら、できる限り気軽な声で言った。「キミ、名前は？」

「何でこんな時に。」ナラカはそう言って、パルトに気づかれないうちに、くすつと笑った。「ナラカ・ホーライクよ。」

「ぼくは、パルト・リトランデ。」パルトははにかんで言った。「薬、ありがとう。」

「何を馬鹿なことを。」そう言ってナラカは、そのままその場を去った。

パルトは、何の疑いもなく、瓶に入っていた液体を飲み干した。するとその瞬間から体から痛みが引くのを感じた。ドラゴンであるために感覚の鋭敏さも人間とは一線を画しているパルトは、それが間違いなく解毒剤であることを感じ取っていた。

―パルトが戦っていた場所から一キロほど離れた林―
ガシイン！

大きな音を立てて、鉄製の棍棒と短剣がぶつかり合う。そして、次の瞬間にはそれが一度離れ、間髪入れずに再びぶつかり合う。

ゼツタは右手に持った短剣で棍棒を防ぎ、左手の二本目をバードの首めがけて切り付ける。バードは棍をグルリと一周回転させて、二本の短剣を弾く。

そしてすばやく棍をまっすぐゼツタに向けて構え、金属の先端をゼツタに突き出す。ゼツタはそれをバックステップでかわす。

「まさか貴様がアルカナにいたとはな、バード・・・。」ゼツタは冷静な声でそう言った。「なぜカルダなどに与しているのだ？貴様は誰よりもゴート一族を嫌っていたはずだ。」

「お前の知っている俺、ならばな。」バードはそう言って右手で回転させて加速させた棍棒をゼツタの左のこめかみに向かって打ち付けた。

ゼツタは屈んでそれを避け、両手に逆手に握った短剣でバードに切り付けた。バードは体を大きくのけ反らせてそれをかわす。短剣の鋭い刃がバードの胸の数センチ上を掠める。

そして上体を起こしたバードが再び棍をゼツタに向かって打ち付ける。ゼツタは両手の短剣でそれを防ぎ、弾き返す。二人はそこではほぼ同時に後ずさり距離をとる。

「それにしても強くなつたな、バード。驚いたぞ。」ゼツタは少

し呼吸が乱れた様子で言った。

「いつまで俺の上官のつもりでいる、ゼツタ！」そう言うバードもまた少し息が上がっている。「俺は失望したぞ。かつて俺が敬愛したリーダーが、この程度だったとはな。」

「一体、どうしたというのだ、バード。」ゼツタは多少困惑した様子をみせて言った。「昔の貴様は、もっと・・・あれから、何があつたのだ？」

「何があつたか、だと？・・・それは、お前が一番良く知っているはずだ！」そう言つてバードは再びゼツタとの距離を一気に詰めた。そして棍を振り回して怒濤の連撃を浴びせる。ゼツタはそのあまりの速さに、防御をするのが精一杯だった。

「くっ・・・」ゼツタはそう言つて力をこめてその棍を短剣で大きく弾く。バードは思いきり突進してたのが裏目に出て、大きな隙を作つてしまう。すかさずゼツタは短剣を突き出す。バードはそれをかわそうとするが、タイミングが遅かったためにその体に浅い切り傷が走る。

「己の力におごり、勝利を焦る。それが貴様の弱点だ、バード。」ゼツタはバードに向かって呟くように言った。「そうやってすぐに熱くなる。そういう所は昔と変わっていないな。」

「だまれ、裏切り者が！」バードはそう叫んで棍でゼツタを突いた。

そのバードの言葉はゼツタに、事のすべてを悟らせた。「そうか、貴様は・・・あのことを・・・」

「そうだ、ゼツタ！俺は忘れないぞ、お前がリベラを捨てて、姿をくらましたあの日のことを！」バードは怒りのこもった声で言った。「我等リベラがファンタスマ城を落とし、憎きカーズナグを殺し、皇女カーラを捕らえた日の三日後、リーダーだったお前は皇女を連れてリベラから逃げ出した！」

そう叫びながらバードは再び棍でバードを連打した。「そして頭を失つたリベラは、あつという間に離散してしまつた！」

俺はお前を敬愛していた！お前は頭が良く、武術に長け、リベラを一つにまとめていた！なのにお前は、リベラを、俺達を捨てたのだ！」

ゼツタはバードの攻撃をすべて短剣で受けた。今のバードは怒りのままに棍を振るっている。もはやその一撃一撃に、さっきのような鋭さはなかった。

そしてゼツタはバードのその隙を突き、バードの腹に短剣の柄をえぐりこませた。下手に斬られるよりも強い痛み、というより苦しみが駆け抜けたのだろう、バードは棍を取り落として膝を突いた。

「どんな状況でも平静さを失ってはいけない、と教えたはずだ。」
ゼツタはバードを見下ろして言った。「それに、貴様は勘違いをしている。」

「どういう事だ？」バードは疑うように言った。

「俺がリベラを捨てたのではない、リベラが俺を捨てたのだ。」

ゼツタは静かな声で言った。「どうやら、貴様は知らないようだ。あの時、リベラで何があったのか・・・」

そしてゼツタは語りだした。

九章に続く

第九章 「裏切り」

―十二年前 スピルナ帝国首都アルス―

「俺達、ついにやったんだな、リーダー。」当時十七歳のバードは興奮冷めやらぬ声で言った。場所はファンタスマ城の近くの反乱軍リベラのアジト。そこにはランプの明かり一つに照らされて、バードの他に、二人の人影があった。

「ああ。」こちらも当時十八歳だったゼッタは答えた。「これでゴート家による独裁も終わりだ。これからは、新しい時代が始まる。」

それは、リベラがついにファンタスマ城を攻め落とし、カースナグを打ち倒した、その夜の事だった。

「長年の目的を果たしたというのに、あまり嬉しそうではありませんね。」もう一人の男、ゼッタの腹心の部下であり、かのアルト家の分家アルソン家の嫡子・フォールド・アルソンが気づかわしげに言った。「やはり、あの事ですか。」

「俺も今だに、理解できないな。」バードが言った。「なぜ、あのカースナグの娘を捕虜として匿う？」

「カーラ・ゴートに罪はない。それに、まだ子供なのだ、死ぬには惜しい。」ゼッタは静かな声で言った。

「それはそうですが、今までカースナグに虐げられた人々は、それでは納得しないでしょう。このままでは、しがらみは増える一方ですよ。」フォールドはやはり心配そうに言う。

「それでも、俺は自分の方針を変える気はない。」ゼッタは口ではそう言いつつも、実際はどこか不安を感じていた。

これから、スピルナはどうなっていくのだろう。今、こうしてカースナグによる独裁は幕を閉じたが、良い意味でも悪い意味でも、この影響は様々な方面に現れるだろう。何よりスピルナは国土が広すぎる。

皇帝が死んだ今、国の意志をどうやって一つにまとめるか。それが何よりの問題だった。

「それで、」感極まったバードが去った後、フォールドがゼツタに向かつて切り出した。「これから、いかが致しますか？我が主の提案は。」

「アルデバランか。」ゼツタは考え込むように言った。「彼は本当に信用できるのか？」

実はゼツタは兼ねてから、フォールドを通してアルト家の家長・アルデバラン・アルトからの提案を受けていた。彼はカースナグの死後起こるであろう王位争奪戦を予期し、リベラを率いるゼツタの器量を見込んで、アルト家の側に着かないかと勧誘してきたのだ。

初め、その提案をゼツタは拒否して来た。見知らぬ男の配下に成り下がるよりは、信頼できる仲間であるリベラのリーダーであるほうが確実だったからだ。

しかし今、その確実が崩された。もともと危険な武闘派集団で、タカ派の気があったリベラは、関係ないものは殺さないというゼツタの方針に疑問を持っていた。そして、ゼツタが暴君の娘を殺さず捕虜にした事で、その不満は表に出始めているのだった。

このまま手を拱いていれば、近い内にリベラの隊員はゼツタの首を狙いに来るだろう。何よりこの状況でリベラのリーダーの座を奪うことができれば、あるいは新たな統治者となる可能性まで見えてくる。

その計り知れない報酬のために、今までゼツタを信頼し、ゼツタに信頼されてきた者達が、ゼツタの命を狙ってくるのだ。

ゼツタはやり切れない思いを噛み締めていた。とにかく、己の信念を曲げでもしない限り、自分はもはやリベラにはいられない。もしかすると、アルデバランは、ゼツタがこういう状態になることを予測した上で、ゼツタに提案を持ち掛けてきたのではないだろうか。だとしたら、本当に怖い男だ。

「こうなつては、他に頼れる者もいますまい。」フォールドは真剣な声で言った。もともとフォールドが忠誠を誓っているのはアルデバランだが、今ではゼツタにも絶大な信頼を寄せるようになっていた。「それに、主は私の命に懸けて、信用のおける方です。」

「お前がそこまで言うなら、それなりの理由があるのだろうが・・・。」ゼツタはなおも悩ましそうに言った。

「とにかく、ここに居続けたらあなたの命に関わります！」フォールドは普段のきまじめな性格からは想像出来ないような強い口調で言った。それほどにゼツタを尊敬し、その安全を案じているのだ。「分かっている・・・だが・・・」そう言いかけてゼツタは突然黙り、しばらく経ってから大きなため息を一つして言った。「解った。お前がそこまで言うのなら、一度会っただけ会ってみよう。そのアルデバラン・アルトに。」

それを聞いたフォールドは安堵の表情を見せた。

こういう訳でその翌日、ゼツタはフォールド・アルソンと共に監禁されていたカースナグの娘・カーラ・ゴートを連れ、早朝のリベラのアジトをひそかに抜け出したのだった。それは、リベラの幹部達がゼツタ暗殺を計画していたまさにその日のことだった。

「・・・そんなことは知っていた！」ゼツタが語り終えると、バードが怒鳴り気味に言った。「だが、どんな理由があるうと、お前がいなくなったせいではリベラは収拾が着かない暴徒と成り果て、それがスピルナ動乱を引き起こす引き金となったことに変わりはない！確かに、リベラ内に反乱の兆しがあることを知っていたが、俺はお前を信じていた！お前ならば、リベラ内の反乱も、うまく諫めることができる！と信じていた！俺は、そんなお前の忠実な部下としてその手伝いができることが誇りだったのだ！」

だがお前は逃げた！それは、俺達リベラを、そしてスピルナ動乱

の犠牲となつた数え切れない人々の命を見捨てたという事と同義だ！」

今や感情に任せて棍を振るバードの攻撃を、ゼツタがかわすのは容易な事だった。ゼツタは目を細め、自分のせいで復讐者となつてしまった男を見つめた。そう、確かに貴様の言う通りかもしれないとゼツタは思った。自分は多くの犠牲を、間接的にはあるが、生み出してしまった。そこまでしてリベラを去り、アルト家の側にくく価値があつたのかと思つたのは一度や二度ではない。だが、それでも。

「あの頃のリベラは、もはや本来の姿を失つてしまっていた。」「ゼツタは諭すように言った。」「ファンタスマ城を落とした事で浮かれ、自分に酔いしれ、もともと持っていたはずの壮志を失つていたのだ。仮に俺がリベラに残つたとして、それですべてが上手くいったとは限らない。」

「そんなのはただの言い訳だ。」「バードは突き放すように言った。」「そうかもしれない。」「ゼツタは突然動きを止め、重い口を開いて、言った。」「確かに、俺の力不足が、スピルナ動乱を引き起こしてしまつたのかもしれない。スピルナ動乱が始まつた日から、その責任を感じなかつた日はない。」

だが、俺はそのせめてもの罪滅ぼしのためにアルデバランと共にスピルナ動乱の犠牲者を少しでも抑えるために戦つてきた！もしそれでも貴様の気が収まらぬというなら、貴様のその棍で容赦なく俺を殺せ！

だが、ならば一つ約束してくれ！すべての責任は俺が負う！だから、せめてこれ以上、貴様のその手でスピルナを傷付けるな！貴様ののような正義感の強い、良い人間が人を傷付けるのを見たくない！頼む！」

その時、バードの棍がゼツタに迫つた。ゼツタはもはや動こうとせず、覚悟を決めてその瞬間を待った。

しかし、棍がゼツタの身体に触れることはなかった。ゼツタは目

の前の、かつての部下を見つめた。

「そうやって、いつも自分を犠牲にし、他人を重んじる。常にまっすぐで、自分の信念を曲げない。」バードはゼツタの頭の横で棍を寸止めにした状態のまま言った。「お前はいつも、そうだった。お前のそういう所を、俺は尊敬していたのだ。そんなお前を、どうして殺せるというのだ!？」

「バード・・・」ゼツタは、バードの目に光を見た。その光は、頬を伝って、地面へと落ちた。

二人の間に、それ以上の言葉は要らなかった。

――テラール村付近の街道――

槍と剣が、目にも止まらぬ早さでぶつかり、離れる。そこで行われていたエータとエストの戦闘は、ほぼ完全に互角といってよかった。といっても、片腕に傷を受けつつアルカナの精鋭の一人と同格に戦っているエータはやはり、化け物じみていると言わざるを得ない。最もそれは、エータが持っている武器の力あつての事ではあるが。

「お前・・・その武器、やはり隊長の物と同じ、神器の一つか・・・!」エストはエータの持つ金色の槍を見つめて言った。

「良く知ってるじゃねーか。」エータは多少自慢げに言った。「コイツはレアロス家が何千年もの間、代々受け継いできたイクイア王国に奉られていた三つの神器のひとつ、聖槍“エイレア”だ。言っとくが、コイツは凶暴だぜ!」

エータがそう言うのに呼応するかのように、エイレアは金色の光を放った。エータがエイレアを振るうと、その金色の光が実体を伴った衝撃波となってエストを襲う。街道の周りにあった木々はその衝撃波を受け、一瞬にして切り刻まれるが、驚いたことにエストは剣で衝撃波を受け止めていて、大きなダメージを受けた様子はなかった。

「ちつ、やっぱりてめえもただもんじゃ無さそうだな。」エータは防止をまぶかに被った黒装束の男・エストを見て、ニヤリと笑って言った。

「・・・なぜ笑う？」エストは純粹に気になったような声で尋ねる。

「何言っただよ。そんなの、面白いからに決まっただろうが！」エータはさも当たり前のように言った。「ここしばらく本気で戦える相手が居なかったからな！」

エータは片手でエイレアを振り回し、エストに怒涛の連撃を浴びせる。エストも剣を巧みに操り、その攻撃をよけていく。

しかし、エータがエストの一瞬の隙を突き、勝利を確信したその瞬間、不意に左腕の傷が強烈な痛みを発し、エータは逆に隙を作ってしまう。エータはエストの反撃を、すぐさま後ろにかわして、エストと距離を取った。

「ちつ・・・」今の攻撃でエータを仕留め損ねたエストは、いらだたしげに舌打ちする。

「それにしても、妙だな。」突然、エータが言った。

「何がだ？」

「てめえは、カルダ・ゴートごときの下につくような器じゃねえ。」「エータはエストを睨んで言った。「戦えば分かる・・・てめえは、カルダの下につきながら、カルダのさらに上を見ている。違つか？」エストはエータのその問いに、しばらくの間の後に答えた。

「戦うだけでそこまで見抜くとは、妙なのはどっちだ。」「そう言っただけでエストは帽子を脱いだ。「まあ、流石はレアロス家の嫡子、とでも言うべきなのだろうな。この場合。」「

「勿体つけないで答える。てめえの目的は何だ？」エータが声に凄みを利かせて聞いた。

「目的は何だと聞かれて素直に答えるやつはいないだろう、特にこんな状況では。」「エストはエータを小馬鹿にするような口調で言った。

「そうだろうな。」エータはニヤリと笑って言った。「だからこそ、力づくで聞き出す楽しみがあるって訳だ。」

エータはさも楽しそうにそう言っ、金色の槍、聖槍『エイレア』を構えた。

―エータとエストが戦っている街道の脇の雑木林―

「よお、ちょうど良かったな。」ヴァイスは不敵な笑みを浮かべていた。「丁度めえと殺り合いたかった所だぜ。アトル・アルト。」

「そうですか？」アトルは落ち着いた声で言った。「僕は別にあなたに興味はありませんがね。」

「・・・ム力つく言い方がつて。」ヴァイスはイライラした声で言った。「これだからめえらアルト家は気に食わねえんだ！」

ヴァイスは手に装備した鉤爪をアトルに向けて言った。

「あの日からずっと、この日を待っていた・・・一族の敵は取らせてもらっぜ！」

十章に続く

第十章 「復讐の爪」

「・・・やはり、その話でしたか。」アトルはため息混じりに言った。

「そうだ。スピルナ動乱で、てめえらに滅ぼされたハルライガ一族の恨みを忘れたことは一度もねえ！」ヴァイスは両手の三本の鉤爪を煌めかせて言った。「オレはアルト家を同じ目にあわせてやると誓ったんだ！」

そう叫んで飛び掛かってくるヴァイスを、アトルは軽やかな動きでかわす。

「まったく・・・」アトルはヴァイスを見つめて言った。「そんな直線的な攻撃じゃ、僕は捕まりませんよ。」

そのアトルの言葉を知ってか知らずか、ヴァイスは再びまっすぐアトルに飛び掛かる。アトルはやはり、さも簡単そうにそれを避ける。

「だから、そんなんじゃ・・・」しかし、次の瞬間、アトルも予想していなかった事態が起きた。

突然、ヴァイスのスピードが劇的に上昇したのだ。そのあまりに突然の事に、アトルは対応できずにヴァイスのタックルをともに喰らってしまった。

「ぐ・・・まさか・・・」木にたたき付けられ、アトルは痛みを堪えて唸った。

「今の一撃で意識を失わないとはな。そいつがアルト家に伝わる『バチ』ってやつか!？」ヴァイスは高揚した声で言った。

ヴァイスの言う通り、アトルは咄嗟にバチの力で体を保護して、辛うじて今の衝撃を受け止めていた。そうでなければ、この一撃でアトルは死んでいただろう。

「そう言うそちらこそ・・・」アトルはヴァイスを睨んで言った。「真玉を、使ったのですか!？」

「まあな。」ヴァイスは答えた。「お陰で力が漲るぜ！」

「やめた方が良いですよ。あれはそんな軽い気持ちで使っていない代物ではありませんから。」アトルは彼らしくない怒気をにじませた声で言った。

「ああ？てめえが真玉の何を知ってるってんだ！？」ヴァイスはアトルの口調にいらついたような声で言った。

「知っていますよ。あなたが想像しているより、よっぽどね。」

アトルは答えた。「僕達アルト一族は、イクイア文明の三人の生き残りの一人、アルクトウルス・アルトの子孫ですからね。」

「ほう、そいつは初耳だな。」ヴァイスは多少驚いたように言う。「だがそれなら話が早い。てめえの血を手に入れば、ついに真玉が完全に封印から解き放たれるって訳だ！」

「そう簡単に行きますかね！」アトルはそう言っ、引き抜いた剣にバチを纏わせる。剣は淡い青色の光に包まれ、その効果を証明する。

今度はアトルが攻める番だった。アトルは光る剣でヴァイスを切り付ける。しかしヴァイスは、真玉によって強化されたスピードでそれをかわす。

「どうした、威勢がいいのは口だけか！？」ヴァイスは自分が得た力を心から愉しむかのような声音で言った。「ちょうどいい、オレの新しい力もちよつとばかし試させて貰うぜ！」

そう言っヴァイスは首から下げた細長い笛を口にくわえて、それを吹いた。

しかし音はでなかった。これは犬笛だ、とアトルは直感した。人間には聞こえない周波数の音を出して、あらかじめ訓練された犬を呼び出すのに使われる笛だ。

その犬笛はすぐに効果を表した。辺りのしげみがざわついたかと思つと、あらゆる方向から、数え切れない数の犬が姿を現した。それぞれに毛の色も、犬種も違う。中には首輪を付けられた犬もいれば、明らかに野性の犬もいた。

「その笛、ただの犬笛ではありませんね。」アトルはその様子を見て言った。明らかにその犬たちは、あらかじめ用意されたものではなかった。全員の共通点といえば、目をぎらつかせて牙を剥き出しにして、凶暴そうに唸りながらアトルを取り囲んでいることくらいだった。

「その通り！」ヴァイスは答えた。「前にてめえんとこの隊長が言ったように、オレらハルライガ一族が持つのは、動物の本能に働きかけて操る術・獣操術だ。もともと狩猟民族だったハルライガ一族は、動物の本能を研究し、それを操る様々な方法を編み出した。この笛もその一つって訳だ。こいつは犬にだけ聞こえる特殊な音波を出して、その音を聞いた犬を凶暴化させる。たとえばそれが、訓練された犬でなくてもな！」

そう言っただけでヴァイスは再び笛を吹いた。それが合図となって、アトルを取り囲んでいた凶暴化した犬たちが、一斉にアトルに襲い掛かった。

「まあ、そうは言っても、今までこの笛で操れるのは訓練された犬だけだった。それが、真玉の力によってパワーアップされたってことだ！」狂犬たちと格闘するアトルに向かって、ヴァイスは言った。

そうか、とアトルは考えた。地竜の谷でヴァイスがああ幼竜達を操ることができたのは、あの時からすでにヴァイスが真玉の力を得ていたからだだったのだ。当時、真玉はゴート家の血による一段階の解放しかされていなかったはずだ。その力で子供とはいえドラゴンを操ったのだ。にわかには信じられないような効き目である。

しかし、そこで狂犬の一匹に襲い掛かれて、アトルは思考を中断させた。狂犬の数は始めよりも増えている。恐らくは、あの笛が聞こえる範囲のすべての犬が凶暴化されたものの、その距離によって到着する時間が変わっているのだ。

アトルは心を痛めつつ、襲い来る狂犬達の首を掻き切っていた。狂犬とはいえ、特別身体能力が上昇する訳ではないようで、個々の

力だけ見れば、バチを纏って強化されたアトルの敵ではなかった。しかし、それでも狂犬すべてを殺すには時間もかかり、また体力も消費した。バチを使い過ぎたのだ。

「どうやら、だいぶ消耗したみてえだな。」ヴァイスはアトルの様子を観察して言った。「それなら、オレのもう一つの技を見せてやるよ。」

言うが早い、ヴァイスはダッシュでアトルとの間合を詰める。それと同時に、ポケットから取り出した小さな何かを、口に含んだ。それを噛み割るカリツという音が鳴る。

「食らいな！！」ヴァイスはそう叫んで、アトルに向かって大きく息を吐いた。その途端、アトルは鼻に付く鋭い匂いを感じた。慌てて鼻を押さえるが、すでにいくらか吸ってしまった。もし毒の類なら、非常にまずい状態だ。

「安心しな、そいつは毒なんかじゃねえ。」ヴァイスはアトルの反応を見て言った。「ただし、毒よりずっと質の悪いもんだがなあ！」

しかしアトルには、その言葉に反応している暇はなかった。突然、脳の奥で妙な感覚がしたのだ。まるで猛獣に囁きかけられるような、頭蓋骨の裏に何か自分とは違う生命体が生まれたかのような感覚だ。

「今てめえに嗅がせたのは、レグラ地方にしかない木、バーサクの木の実を、ハルライガー族秘伝の方法で調合した丸薬の匂いだ。コイツはハルライガー族が食べばその闘争本能を極限まで高める力を持つてんだ。だがどうやら、この丸薬の持つ力まで、真玉は強化してくれたみてえだな。今じゃあオレ以外の者がその匂いでも嗅げば自分の内に秘めた本能が暴走し、正気を失ってしまうくらいだ！」

ヴァイスが言っていることがはったりで無いことは、実感しているアトルが誰よりも身に染みて分かつていた。このままでは自分の精神が持たないということが、アトルにははっきりと分かつていた。あの丸薬とやらの影響で自分の奥底に生まれた強烈な闘争本能は、まるでその有り余る感情を発散したがっているかのようにアトルの

中で暴れ回っていた。

「おっと、ついでに教えておいてやるぜ。」ヴァイスは勝ち誇ったような表情を浮かべていた。「実はな、オレ達アルカナはこの丸薬を、スピルナの何人かのお偉いさんに仕込んでおいたのよ。それも、ちょうど今頃効果が現れるように、時限式にしてな！」

その言葉に、アトルは絶句した。もしこんな効き目のある丸薬に、スピルナの上層部が毒され、その闘争本能を暴走させたとしたら、一体、どれほどの被害が出るだろうか……！

しかし今のアトルにはそれよりも自分自身の方が問題だった。何とかして、この状況を打破しなければ。

そう言えばヴァイスは、この丸薬は真玉の力のお陰で、人間を暴走させる能力を得たと言っていた。なら、真玉の力を封じることができれば……。アトルは、そこですべてを覚った。

その時、ヴァイスの目の前で予想もしない出来事が起こった。アトルの体が青い光に包まれ、それと同時に今までアトルを襲っていた苦痛が消え去るのが目に見えて分かったのだ。

「てめえ、一体何をしゃがった……！」ヴァイスは信じられない様子で言った。「なぜ丸薬の力が効かねえ！？」

「それは、僕が……」アトルは大仰に答えた。「……真面目だからです！」

「いやそこは関係ないだろ！」こんな状況にも関わらずいつっこんでしまうヴァイス。

「……ですよねえ」とアトル。「とまあ、それは冗談として……」

そして今や完全に回復したアトルは鋭い目線でヴァイスを睨んだ。「どうして僕が丸薬の力に打ち勝ったのか、知りたいですか？」
「……ああ。知りてえ。」ヴァイスは敵意を剥き出しにしたまま言った。

「まことに冗長な事ですが、これを説明するには、まずイクイア

文明の話からしなければなりません。」アトルはそう前振りして、語りはじめた。

「ご存知の通り、イクイア文明の生き残りは三人。カースローダ・サルト・ゴート、エアセイラ・レアロス、そしてアルクトウルス・アルト。彼等三人はどれもイクイア文明の最高貴族の生まれで、エリユアルス王自身の血も継いでいました。」

イクイア文明の崩壊を予期したエリユアルス王は、次の世代へとイクイアの血を残すために、その三人を選びました。そしてその三人の血を証として、真玉に強力な封印をかけた。それから、エリユアルス王は三人にそれぞれ二つずつの贈り物を渡したのです。

まず、カースローダ・サルト・ゴートにはイクイア文明で奉られていた三神器の一つ・魔鎌“サターナ”と封印された真玉の本体が贈られました。今、その子孫であるあなたがたの隊長・カルダ・ゴートが持っているものです。

そして次にエアセイラ・レアロスには、“サターナ”と同じイクイア三神器の一つ・聖槍“エイレア”と、イクイア文明の様々な技術を記した書が与えられました。それゆえ今、全ての国の中で唯一エンリアル王国のみが、イクイア文明の技術の一部を受け継いでいるのです。

そして最後にアルクトウルス・アルト。彼に与えられたのは三神器の一つ・神剣“ロウエル”と『バチ』の力です。バチは、人や物などの力を高めるだけの物ではありません。この力は、イクイア王家に代々伝わっていた特殊な能力です。そしてそれが、イクイア文明の発展の理由の一つなのです。

もともとバチは、真玉の力を制御するための力。その力を王が使うことで、真玉を手中に納めたイクイア文明はあれほどまでに強力な力を得ることが出来たのです。

そして、イクイア文明が滅びるとき、エリユアルス王は後の世で、悪しき者の手に渡った真玉が暴走するのを恐れ、その時の抑止力として、バチをアルクトウルスに受け継がせたのです。」

そこでアトルは一度言葉を切つて、意味ありげな視線をヴァイスに送った。

「ここまで言えば、もう解りますね。」

「つまり、てめえは真玉の力を抑える効果を持つバチの力を利用して、オレの丸薬にかかつていた真玉の影響を打ち消した。そして丸薬は真玉の恩恵を失い、無害化された・・・って訳か。」ヴァイスは苦々しそうに言った。「つまり、てめえらアルト家の人間には真玉の力は通用しねえってことかよ！」

「とどのつまり、そう言うことになりますね。」アトルは事もないに言い放った。

「・・・てめえらの、そう言うところが、オレは嫌いなんだ。」ヴァイスは憎悪を滲ませた声で言った。「てめえらアルト家はいつも、表向きには聖人のように振る舞つて、平等主義やらなんやらと並べ立て、その裏で人々を力で押さえ付けやがる！」

てめえらの言うその平等主義が、本当にスピルナに平和をもたらしたのか！？いや、違う！今なおスピルナには差別が残っている！救いの手を差し延べられることのない戦争孤児は今この時も地べたをはいずり回って生きている！オレ達ハルライガー族が治めていたレグラ地方は、今主を失って荒れ果てている！

てめえらアルト家は、自分達だけ良ければいいと思つてやがる。

自分達の周りの地域だけ平和になれば、それで良いと思つてやがる！現に、首都アルスのあるゴールテス地方が平和を謳歌している裏で、首都から最も離れた辺境のレグラ地方は、貧困と差別に喘いでる！泥棒や追い剥ぎが増えて、善良な人々が危険にさらされても、アルデバランは見向きもしない！

それがスピルナの現実だ！どんなに綺麗事を言おうと、この事実がなくなることはない！全ての民が平等になるなんて、ありえないんだよ！！」

ヴァイスは丸薬の力で上昇させた闘争本能のままに、アトルに襲い掛かった。しかし、だからと言ってヴァイスが悪あがきを始めた

という訳ではない。むしろ、純粋な闘争本能はヴァイスの直感と戦闘スキルを劇的に上昇させ、死をも恐れない狂戦士へと変えたのだ。こうなるともはや、ヴァイスの動きを見切ることが誰にも出来ないだろう。ヴァイスは野性の赴くままに、変幻自在に攻撃して来るのだ。そして何よりその覇気は、常人にはありえないような物だった。

もし、今のヴァイスを何かに例えるなら、卓越した殺しのスキルを持つ屈強な戦士と、闘争本能に燃える狂犬とが混ざり合ったもの、と言えるだろう。

「確かに、あなたの言うことは正しいかもしれませんが。」アトルはヴァイスの攻撃から逃れつつ言った。「僕の父、アルデバランも全能ではありません。そもそも、全ての人間が平等になるなんて、ありえない事かも知れません。」

そしてアトルは自分の剣にバチを込めて、ヴァイスの攻撃を弾き返した。

「でも・・・」アトルは半ば自分に言い聞かせるように言った。

「何よりも大切なのは、どんな荒唐無稽な夢でも、野望でも、絶対に諦めない事です！そうすればいつか、自分の望んだ通りでなくとも、何かの答えが返って来るはず。どれほどありえないように見えることでも、最後まで諦めなければ、きっと何かを変えることができるはず！僕は、そう信じています！！」

その言葉に全てを乗せるように、アトルはヴァイスに向かって渾身の一撃を放った。

「・・・僕は、あなたのその思いを忘れることは無いでしょう。」倒れたヴァイスに向かって、自分に誓いをたてるかのように、アトルは言った。「たとえば父には無理でも、僕はいつかきっと、本当の意味での平等を作りあげて見せます。それがいつになるかは、分からないけど。」

十一章に続く

第十一章 「そして最後の戦いへ・・・」

―テラール村の東二キロにある空き地―

「本当に、久方ぶりだな、カーラ。」カルダは皮肉をこめた声で言った。

「兄さん・・・兄さんはいつから、こんな残酷な人になってしまったの？」カーラは尋ねた。言葉遣いが半ば本音モードになっている。アトル以外でカーラに本音を表にださせられる人間がいるとすれば、兄だけだった。

「いつから？」カルダは挑発的に聞き返した。「ならば逆に聞くが、カーラ、お前はいつからオレの敵になった？」

「それは・・・」カーラは言い淀んだ。すかさずカルダが言い募る。

「オレは十二年前のあの日、オレが全てを失ったあの日に、偶然城を離れていて無事だった。城に戻って何が起こったかを知って、オレはリベラに復讐し、捕虜になったというお前を救い出すことを誓った。お前が生きて、いつかオレのもとに帰ってくることだけを信じて、オレは残った兵を引き連れて戦いへと身を投じた。そしてリベラを倒し、やつらのアジトの牢屋を探し回ったが、お前はどこにも居なかった。それから八年たってお前が再びオレの前に現れた時、あるうことかお前はアルト家に寝返っていた。八年間必死で探し続けてきた妹を次に見たのは、敵の軍の中だった。それはオレに対する、明らかな裏切りだった。」カルダは氷のように冷たい声で言った。

「兄さん、違うの、それは・・・」カーラは堪えられなくなつて口を開いた。しかしその瞬間、カルダは真玉によって大幅に強化されたスピードで距離を詰めてきた。そのあまりの速さに、カーラはまったく反応できなかった。

「お前に、オレの気持ちができるか？」そう言いつつ、カルダは

無情に黒い大鎌を構えた。

そして次の瞬間、カルダは鎌を逆袈裟に切り上げた。カーラは辛うじて大剣を盾にするが、呆気なく弾かれ、その衝撃でカーラ自身も吹っ飛ばされた。

「なるほど。」カルダは興味深げに言った。「ゴート家に伝わるこの神器、魔鎌“サターナ”の一撃を受けて壊れないということは、そいつも神器の一つか？」

「神剣“ロウエル”」。本来はアルト家に伝えられる神器よ。でも――カーラは言った。「そんなことより、今は私の話を……」

「裏切り者の言葉など、聞く意味はない。」カルダは非情な声で言った。そして躊躇いもなく次の攻撃を繰り出す。カーラはまたも、ロウエルごと弾かれる。

「兄さんは……こんな人じゃなかった。」カーラは荒い息で言った。「昔の兄さんは……」

「オレをこんなにしたのは誰だと思っている？」カルダは言った。「オレもお前も、今となつては昔と同じではない。確かな事は、お前が今、オレの敵としてここにいるということだけだ。」

その後もカルダの非情な攻撃は続いた。もしカーラが反撃しようと思えば、多少の反撃はできただろう。しかし、カーラには実の兄を攻撃する事はできなかった。何より、こんな誤解を抱いたままでは。

「もはや問答は無用だ。」カルダは言った。「スピルナ帝国復活のために、お前には死んでもらおう。」

カルダは真つ黒な大鎌を振り上げた。カーラは危険を察知して、咄嗟に右へかわした。次の瞬間、さっきまでカーラがいた場所に、漆黒の閃光が走った。「サターナ」の刃はやすやすと地面に深く突き刺さる。カルダは真玉で強化した筋力を使って、一瞬でそれを引き抜いた。

おかしい、とカーラは思った。もし兄さんが私を本気で殺す気なら、既に私は死んでいたはず。それだけの實力差が、今の二人には

あった。しかし、私はまだ生きている。ということは、もしかしたら・・・

だとしたら、私はまだ、死ぬ訳には行かない・・・！

カーラは決意を決めて神剣“ロウエル”を振りかざした。そしてカルダの攻撃を、得意の回転を利用した舞のごとき剣術で振り払った。

そして間髪を入れずに、今度はカーラの攻撃が始まった。カーラとカルダの間には歴然とした能力差があったが、使っている武器の能力は拮抗している。まったく勝算がない訳ではない。

カーラはロウエルを素早く回転させ、カルダに詰め寄って行った。カルダはまだ余裕を残しているようだったが、状況は間違いなく変わりつつあった。

「回転を利用した剣術か。」カルダはカーラの攻撃を観察して言った。「なるほど、お前もゴート家の端くれというだけの事はある。」

「どういう意味？」

「お前はその剣術を自分で編み出したつもりだろうが、」カルダは言った。「恐らくお前の中のゴート家の血に刻み込まれていたのだろうな。その戦い方は、ゴート家が代々使ってきた物によく似ている。分かるか？」

カルダはそこで一度言葉を切った。

「その戦法は、もともと剣を使うための物ではない。鎌を使うための物なのだ！」

カルダはそこから一気に盛り返した。“サターナ”を素早く巧に回転させて、怒涛の連撃を繰り出す。その動きは、カーラの戦い方とそっくりだった。最後の一撃で、カーラは何メートルも後ろに吹っ飛ばされた。あまりの衝撃に“ロウエル”はカーラの手を離れ、近くの地面に突き刺さった。カルダはそんなカーラに止めを刺すべく余裕たつぷりに歩み出した。

「兄さん、聞いて！」カーラは肩にできた打ち傷を庇うようにし

て、言った。「私は、兄さんを裏切ろうとした訳じゃないの！」

カルダはにわかに足を止めた。今なら言葉が届くかもしれない、とカーラは思った。

「あの頃の兄さんは、ゴート家を復興させる事しか頭になかった。でも、あの時のゴート家は、権力に溺れて落ちるところまで落ちていた！たとえ兄さんが復興しても、きっとゴート家には未来はなかった！だから私は――」

その時突然カルダが動いた。一瞬にしてカーラの前に移動して来たのだ。その手には、高く振りかざした“サターナ”が握られていた。

「うるさい。黙れ。」カルダは感情の欠落した声で言った。そして、“サターナ”を振り下ろした。

漆黒の鎌がカーラの体を貫くかと思われたその瞬間、“何か”がその攻撃を受け止めた。大きな音が響いて、受け止めた剣は敢なく真つ二つに折れてしまう。

「お前は……」カルダが呟いた。「あくまでもオレの邪魔をするのか、アトル・アルトよ。」

「僕はトランプの戦闘員ですからね。」アトルは言った。「スピルナの民を守ることが、トランプの役目です。」

「アトル……」カーラは半ば安心したような、半ば不安が増したような奇妙な表情をした。

「大丈夫ですよ、隊長。」アトルは言った。「僕が彼に勝って、それで終わりです。」

「フン、真玉によって全ての能力を上昇させたオレに、勝てるとも思っているのか？」カルダが言った。

「なら言って置きますがね、」アトルは鋭い目つきになって言った。そしてカーラから数歩離れた所に突き立っていた“ロウエル”を引き抜いた。「僕は、隊長みたいに甘くはないですよ。」

次の瞬間、アトルとカルダの武器、銀色に輝く剣と、漆黒に染ま

った大鎌とが激しい音を立ててぶつかり合った。

「ほう、良い一撃だな。」カルダは言った。「だが、所詮は生身。それで限界か。」

カルダは素早く“サターナ”を回転させ、目にも止まらぬ速さで第二撃を放った。

しかし、アトルは“ロウエル”を盾にしてその攻撃を受け止めた。その巨大な刃は、青白い光を帯びている。

「その光、まさか・・・」カルダは多少当惑した声で呟いた。「・・・“バチ”か？」

「その通り！」アトルはその声と共にカルダを振り払った。カルダは呆気なく二メートルも後ろに押し戻される。

「なるほど、バチに真玉の力を抑える能力があると言うのは、本当だったか。」カルダは言った。「だが、お前はまだバチを完全に使いこなしている訳では無いようだ。完全に抑えられている感覚は無い。」

カルダの言う通りだった。アトルは、バチの全てを使いこなしてはいない。かつてバチを用いて完全に真玉を操ったと云われるエリユアルス王の時代から、既に三千年の月日が流れている。いくら直系のアルト家といえど、その血は確実に薄まっていた。そもそもアトルに、真玉を操るほどのバチを使うことはできないのだ。

「確かにそうかも知れませんが、」アトルは言った。「それでも、今のあなたなら、倒せる可能性はゼロではない。でしょう？」

「お前が、オレを倒す？」カルダは鼻で笑った。「不可能だな。万に一つもありえない事だ。お前のような、腰抜けのアルト一族ではな！」

その声と共にカルダの持つ“サターナ”が真つ黒な波動を放ちはじめた。その波動は、神器に秘められた神々の力が、継承者の意思のもとに解放され、実体を伴った物だ。

その波動が現れただけで、辺り一帯の空気が激変した。まるで目に見えない圧倒的なエネルギーに包まれたように、周りの大気が重

みを増した。少しでも気を抜けば、途端にそのエネルギーに押し潰され、気を失ってしまいそうな程だった。

アトルが辛うじて意識を保つことが出来たのは、一重にアトルが神器の一つ、“ロウエル”を持つていたお陰だった。実際、背後ではカーラが、その圧力に耐え切れず気を失ってくずおれる音が聞こえた。しかし、振り返って確認する隙はない。本当にカーラを守りたいなら、まずカルダを倒すことが重要だ。

アトルは手元の大剣に意識を集中させた。神々の力を解放した神器に対抗するには、こちらの神器も解放しなければならない。しかし、その事に集中することすら、今のアトルには難しかった。今まで神器と戦ったことのないアトルは、存在するだけで放たれるその威圧感がこれほどの物とは想像も出来なかった。

カルダは黒い波動をその身に纏い、地面を強く蹴った。一瞬にして、アトルとの距離が詰まった。アトルは急いで“ロウエル”を掲げ、盾にする。圧倒的な力にアトルは後ろに大きく吹っ飛ばされた。後ろにあった岩にぶつかって、やっと止まることができた。

カルダは間髪入れずに追撃して来た。アトルの目の前に今にも首を刈り取らんとする大鎌の刃が迫る。アトルは間一髪の所でその攻撃を避けた。アトルの背後にあった大きな岩が、凄まじい音を立てて斜めに両断された。

「フン、逃がしたか。」カルダは余裕の表情で言った。「だが、いつまでそうやって躲し続けていられるかな？」

「僕は・・・」もはや死さえも覚悟した時、アトルは無意識の内に呟いた。その脳裏を、様々な思いが駆け巡る。そしてその大半はカーラとの思い出だった。初めて出会った時、二人はどちらも子供だった。当然、ゴート家の興亡の事も、周囲で起こっているスピルナ動乱の事も、何一つ分からない頃だった。昔から人見知りをしたアトルだったが、どういう訳かカーラの前でだけは素の自分に返ることができた。それはカーラも同じだったようで、二人はすぐに打ち解けた。

それから何年か経って、成長した二人は己の運命に立ち向かわなければならなくなった。どういう理由でゴート家が滅亡し、カーラが孤児となったか。それによって勃発したスピルナ動乱が、どれほど罪なき人々の命を奪ってきたか。そして、これから先を担うであろうアトルとカーラが、何をすべきか。もし、どちらか一人だけだったなら、その運命の重圧に堪え切ることなど出来なかっただろう。特にカーラにとって、世界でたった一人となってしまった肉親、兄のカルダがファンタスマ城陥落の日からどんな人間に様変わりしてしまったかをその目で見ることは、これ以上ない苦痛だっただろう。

それでも二人が強く生き抜いてきたのは、互いの存在があったからだ。そして今、ファンタスマ城陥落の日から始まった全ての決着が、着こうとしているのだ。カーラのために、そしてスピルナ公国の人々のために、負ける訳には行かないのだ。

その瞬間、アトルの全身から青い光がほとばしった。その光に気圧されて、カルダは数歩後ろへ退いた。

「これは・・・」カルダは戦慄して言った。「何という巨大なバチだ・・・！だが、これほどの大量のバチ、使えばお前自身の身がもたないぞ！」

「・・・たとえば死んだって構わない。」アトルは落ち着いた、しかし威厳に満ちた声で言った。「僕は、自分自身なんかより・・・カーラが傷付く方が、よっぽど嫌だ！！！」

そう叫んで、アトルは鋭い眼差しでカルダをねめつけた。

十二章に続く

終章 「終わりと始まり」

「あんだって、そうだったんじゃないんですか!？」アトルは怒りの籠った声で言った。「カーラと離れ離れになった時、あんだって、カーラの為なら自分の命なんてどうなっても良いって、それくらいの覚悟で戦いに身を投じたんじゃないんですか!？」

アトルが放つ強大なバチと、カルダの放つ黒い波動が、その場の空気をビリビリと張り詰めさせていた。今でこそそのエネルギーは互いに拮抗して、その空間は均衡を保っているが、もしどちらかが少しでも行動を起こせば、その均衡はすぐに崩れてしまうだろう。

「なのに何故あんたは、そのカーラを傷つけるような事をするんですか!？」アトルは言った。

「カーラはオレを裏切った!」カルダは言った。「裏切り者に刃を向けて何が悪い!」

「それは誤解です!」アトルがささず言い返す。「カーラは、本当は……」

「うるさい!」しかしカルダは、それを聞こうとはしなかった。

そして、“サターナ”の黒い波動をより一層強めて、その大鎌を振り上げた。

(ぐ……このままじゃ、僕の言葉は彼には届かない!)アトルは思った。(やっぱり、戦うしかないのか……!)

しかし、理性ではそうするしかないと分かっているにも、アトルの心にはまだ迷いが残っていた。カーラの目の前でその実の兄を倒さなければならぬと思うと、罪の意識が頭をもたげた。しかしどちらにしろ、カルダから攻撃して来られたら、反撃するしかないだろう。もしカルダを倒せなければ、カーラも死ぬことになるのだ。

その時、カルダが行動を開始したため、アトルは思考を中断せざるを得なくなった。

カルダが動いたことにより、“ロウエル”と“サターナ”によつ

て辛うじて保たれていたその場の空気のバランスが崩れはじめた。アトルにはまるで、空間が歪みに悲鳴を上げているようにさえ見えた。それほどに、神器の持つ力は強大なのだ。

アトルは以前、父のアルデバランから神器に関する基礎知識を教わっていた。それによると、神器とは太古の昔この世界を治めていた神々の力を授かった伝説の武器で、その秘められた力は無尽蔵といっても過言ではない。

ただ、いくら武器のエネルギーが無限でも、それを操る人間が完全で無い以上、その力の全てを操ることなど出来ないのだ。だから神器がいかに力を発揮できるかは、持ち主の能力次第なのだ。特に神器同士で戦うときには、必要なのは『いかに強い力を得るか』ではなく『いかに神器の力をより使いこなせるか』が重要なのだという。

そのため、同じ神器を持っていたも、持ち主がそれを使いこなしていなければ、それはただの壊れただけの武器になってしまうのだ。

その時、不意に“サターナ”が振り下ろされた。アトルは怯まずに“ロウエル”でそれを受け止める。金属同士が激しくぶつかり合う音がして、火花が散った。

「オレがカーラと再会した時、カーラは自分の意思でお前達アルト家の元に残ると言った！その頃まさにゴート家と対立していたアルト家にだ！それを裏切りと言わずに何と言うんだ！」カルダは力任せに“サターナ”を振るいながら言った。

「確かに、カーラはあの時自分の意思で僕等の元に留まった。でもそれは、あんたを裏切ったからじゃない！」アトルは言葉を続けた。ようとしたが、カルダがそれを許さなかった。

「オレからカーラを奪った張本人が、何を偉そうに！」カルダの気迫に圧されてか、アトルはだんだんと追い詰められて行く。

「・・・カーラは頭が良かった。」アトルはなんとかカルダの攻撃を受けながら言った。「カーラは、たとえスピルナ動乱に勝って

も、ゴート家が元のような支持を取り戻して、復興することはないということに気付いていた。だから、あんたを説得して、ゴート家の負の連鎖からあんたを解放しようとした！」

アトルは体に纏ったバチのエネルギーを両腕に集中して、その力で“サターナ”を振り払った。

「カーラが僕達の側に残ったのは、あんたを裏切ったからじゃない。あんたを説得して、ゴート家の呪縛から解放放ち、また、昔のように一緒に平和に暮らせるって信じたからだ！カーラはあんたを信じてた。なのになんであんたは、カーラを信じようとしなんだ！」

そう言いながら、アトルは全身の力を使ってカルダを押し返す。

「黙れ！」カルダは半ば正気を失った声で言った。「黙れ黙れ黙れ！！部外者のお前に、オレとカーラの何が分かる！！」

そう叫ぶカルダの様子は、明らかに異常だった。カーラと生き別れてからのスピルナ動乱での辛く厳しい戦いが、この男の何かを変えてしまったのだろうか、とアトルは思った。カーラからよく聞く思い出話の中のカルダは、分別があり、頭も良く、何より優しい兄だった。

しかしカルダは、アルデバランやゼツタ、その他沢山の頼れる人々に囲まれていたカーラとは違い、たった一人でゴート家の生き残り達を指揮して戦わなければならなかった。そしてそのプレッシャーと苦しみの末に、カルダは心を闇に侵され、自分の元を離れたカーラに対する憎しみが増大してしまったのではないか。

だとしたら、その責任は自分にもあるのではないか、とアトルは思った。もしかしたら、カーラをカルダの元に帰さなかったのは、過ちだったのではないだろうか。

カルダは続けざまに“サターナ”を振るった。考え事に気をとられていたアトルは後手になってしまい、攻撃を受け止めるのが精一杯になっていた。

それならば、カルダを止める責任も、自分にあるのではないか、

とアトルは考えた。何より、カルダに罪なきスピルナの人々に手を出させる訳にはいかない。

アトルは体に纏ったバチの出力を、さらに増大させた。そのエネルギーは過負荷となり、アトルの肉体は悲鳴を上げた。しかし、少しの間なら、なんとか保てそうだった。

アトルは自分の身長程もある大剣、“ロウエル”を翻した。日光がその銀色の刃に反射して、一瞬カルダの目をくらました。

その隙について、アトルはすぐさま反撃に出た。剣を振るう度、刀身に纏った蒼く輝くバチが炸裂する。その光が、カルダを包む真っ黒なオーラと激突した。“ロウエル”の力によって本来の何倍もの力を得たバチと、真玉の影響で、やはり何倍にも強化されたオーラ。それらが真っ向からぶつかり合ったその瞬間に発生したエネルギーは、想像を絶するものだった。

二人の半径十メートルほどの地面が、衝撃波を受けてめくれあがった。草も土も根こそぎ吹き飛ばされ、気を失って倒れているカーラの近くにまで飛び散った。

その圧倒的なエネルギーの中心にいた二人は、互いにバチとオーラに護られて、傷一つ負ってはいなかった。アトルはカーラの側面で衝撃波が及んだのを見て、このままここで戦っているのは危険だと気づいた。

アトルは体を包むバチを両足と両腕に集中させて、一気にカルダを突き飛ばした。しかし、体力を強化されているカルダには思ったほどの効果はなかった。

すると、カルダを包んでいたオーラの一部が、突然カルダの両肩から槍のように突き出た。それは次第に薄く広がっていき、最後には巨大な翼の形になった。するとカルダはその生えたばかりの真っ黒な翼を羽ばたかせ、空中へと舞い上がった。

その様子をアトルが驚きと共に見つめていると、不意に手の中の“ロウエル”が鈍く疼くように振動しているのが感じられた。アトルはその意味を深く考えもせずに、反射的に“ロウエル”にバチを

流し込んだ。

すると、“ロウエル”の蒼い輝きと共に、アトルの背中から何かが生えるのが感じられた。左右を見ると、アトルにもカルダと同じような、蒼い翼が生えているのが見えた。なすべきことは、すぐに分かった。

アトルは迷う事なくその翼を羽ばたかせた。すぐに、アトルの足は地面を離れた。翼は、まるで手足のようにアトルの意思に従った。カルダは、空中でアトルを待ちかまえていた。アトルが飛翔して来たのを見ると、憎しみのこもった目でアトルを睨めつけた。その目を睨み返すアトルの心にも、もはや迷いは残っていなかった。この戦いは、もはや勝つか負けるかだけなのだ。

カルダが“サターナ”を振り上げ、前傾姿勢になった。次の瞬間、カルダは翼を大きく羽ばたかせ、言葉にならない雄叫びと共に突進して来た。アトルも翼を羽ばたかせ、その攻撃を躲す。すると、カルダはすぐさま空中で方向転換して、再びアトルを狙った。

カルダの行動を読んだアトルも、剣を構える。ぶつかり合った“サターナ”と“ロウエル”がけたたましい音を立て、二人は互いの衝撃に弾き飛ばされた。

その衝突によって発生した波動が、辺り一面の空気を揺さぶり、木々の葉をざわめかせた。空中を数メートル吹き飛ばされたアトルは、素早くバチの翼を動かして、なんとかその場にとどまる。見ると、カルダも同じようにして体勢を立て直していた。

今度はアトルが攻め込む番だった。アトルは“ロウエル”を真っ直ぐに構え、カルダに向かって突っ込んだ。その衝撃を“サターナ”で受け止めたカルダは、一瞬ふらついた様子を見せたが、すぐに“サターナ”を回転させて“ロウエル”を絡め取った。そして“サターナ”を大きく振り、アトルを地面に向けて放り投げた。

その力に耐え切れず、アトルの手が“ロウエル”から離れる。それと同時に、“ロウエル”によって増幅されていた分のバチと、背中から生えていた翼が消滅した。当然、アトルの体は重力にしたが

って数十メートル下の地面に向かって落下を始める。

アトルは死を覚悟した。カルダの持つ神器に立ち向かえる唯一の手段である神器を奪われたのだ。例えこの落下を生き延びたとしても、万に一つも勝ち目はない。

その時だった。アトルが急速に近づいてくる地面に目をやると、そこにカーラが立っていた。どうやら、神器から離れたことで意識を取り戻した様だった。

「アトル！」カーラの声が、どこか遠くの音のように聞こえる。その声音は、感情を剥き出しにした本音モードだった。

「死なないで、アトル！」カーラのその声は、その言葉は、不思議とアトルの魂に響いた。

ここで死ぬ訳にはいかない。

その時アトルは、昔アルデバランに教えられた事を思い出した。

「神器は、いつ何時でも真の主の呼び掛けにだけ答えます。」父は、そんな事を言っていた。もし、自分が“ロウエル”に真の主として認められているのなら・・・可能性があるとすれば、それしかない。

「来い、“ロウエル”！」

アトルは叫んだ。地面はもうすぐそこまで迫っている。このままのスピードで激突すれば、まず命はない。しかし、不思議なほど恐怖は感じなかった。

その時、アトルの右手の中に光が満ちた。それはみるみる巨大化していき、ついには実体を伴った剣と化した。それは、先ほどまでアトルが使っていた大剣とはまったく違う、細身の長いレイピアだった。だが、姿が変わってもそれが“ロウエル”であることは、アトルには一瞬で分かった。

その瞬間、アトルの背中に翼が現れた。それも、さっきまでとは比べ物にならない大きさだった。アトルがその蒼い翼を一度羽ばたかせると、それだけで落下のエネルギーは相殺され、アトルは体勢を立て直して再び上昇した。

アトルを仕留め損なったことを知ったカルダは、“サターナ”を高々と構えた。そこに、もはや“ロウエル”はなかった。

カルダは翼を閉じ、一気に下降姿勢に入った。

下から上昇するアトルと、上空から下降するカルダ。蒼と黒、二つの波動、二つの神器が、ほんの一瞬、重なり合った。

その瞬間、周りの世界が、歪んだように見えた。或いは、本当に歪んだのかもしれない。その一瞬は、永遠とも思える一瞬だった。

その時、空中にあつたカルダの体が、ぐらつと傾いた。手からは“サターナ”が滑り落ち、黒いオーラと翼は霧の如く消滅した。アトルはすぐさま下降し、地面にたたき付けられそうになっていたカルダを受け止めた。

「兄……さん」

アトルがカルダを地面に横たえようと、カーラが駆け寄ってきた。その目には涙が浮かんでいる。どれだけ正気を失っていても、兄は兄なのだ。アトルの胸に、罪悪感が深々と突き刺さった。

「カーラ……か……」カルダは蚊の鳴くような小さな声で言った。その次にカルダの口から出たのは、意外な言葉だった。

「カーラ……済まなかった。」カルダは言った。

「……え？」カーラは信じられない様子で聞き返した。

「オレは……本当は、ただ……お前が、羨ましかつたのかも……しれない。」カルダは言った。「お前の周りには、心から信頼できる、仲間がいたが、オレにはいなかった……オレは、自分が……そんな仲間を欲している事を知りつつ……下らないプライドから、お前達の説得を聞きいれることを、拒絶してただけなのだ……」

「……あなたは、かつてはとても優しい人だったと、カーラから聞いています。」アトルは言った。「きっとあなたは、戦争の毒

気にあてられて、復讐に取り付かれてしまっただけなのでしょう。」

「そうか・・・いや・・・」カルダはその時、何かを思い出したようだった。「いつから・・・？いつから、オレは・・・！？」

突然、カルダは頭を押さえて呻いた。

「兄さん！？」カーラが介抱しようとするが、それをアトルが止めた。

「待つて・・・何か、様子がおかしい。」アトルは自分でも訳の分からない事を口走った。どうしてそんな事を言うのか、分からないかった。

「いつから・・・まさか・・・」カルダは、はっと目を見開いた。「全部・・・お前の仕業、だったのか・・・！？」

その時だった。突然その場に人影が現れ、カルダの懷から転がり出ていた真玉を拾った。

「もう遅いぜ、カルダの旦那」

それは、エストだった。

「これは、一体、どういう・・・！」アトルは身構えながら言ったが、二度の戦いの後で、体は悲鳴を上げていた。

「エスト・・・お前が、オレに復讐を仕向けた・・・全ては、真玉を手に入れるために・・・」カルダがエストを睨みつけて言った。

「ま、そんな所か」エストは場の空気にまったくそぐわぬ気楽な声で言う。「まだアルト家の封印が解かれてないようだが、まあいい。カルダ、お前はもう用済みだ！」

「やめ・・・！」カーラの叫び声が、途切れた。エストの剣は、深々とカルダの胸に突き刺さっていた。

「さて、次はアルト家の血でももらうか」エストはカルダから剣を引き抜いた。噴き出した鮮血が、エストとカーラの服を赤く染める。エストはそんな事はまったく気にも止めず、剣をアトルに向けた。

その時、上からエストに向かって炎の塊が降ってきた。エストは

素早くそれを躲した。火炎弾は地面にぶつかり、弾けたが、何故かアトル達は傷つけなかった。

「なんだか、すぐくマズイ状況みたいだねえ。」間延びした声とともに、上空からオレンジに輝く龍・パルトが舞い降りてきた。

「その真玉つての、エネルギーを大幅に増幅させる力があるんだってね。どうも、君に渡しちゃ困ったことになりそうだ。」パルトは、口調とは裏腹に鋭い目つきでエストを睨んだ。

「ち……いくらオレでも、伝説の龍族とでは部が悪い、か。」エストは舌打ちして言った。「まあ、当初の目的は達成した。ここは退くでしょう」

「待て……！」パルトは顎を開き、炎を吐こうとしたが、まだ完全に毒から立ち直っていなかったせいか、鈍い痛みが体を襲った。その隙に、エストはどこかへ姿をくらました。

「兄さん！兄さん！！」カーラの悲痛な声が、侘しい戦場跡に響いた。

「……カーラ……」アトルは声をかけようとしたが、言葉がでなかった。パルトは何も言わず、ただ目を潤めてその様子を見守っていた。

（一体、何がどうなっているんだ？）アトルは混乱する頭の中で考えた。（ただ……確かなことはただひとつ……まだ、戦いは終わってない）

第二次スピルナ動乱 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8001q/>

フェトレアス物語～第二次スピルナ動乱～

2011年11月13日21時14分発行